

【NRC自主調査レポート】

# ユニバーサルデザイン理解・浸透度 定点観測調査

---

～「障害の社会モデル」は日本社会にどこまで浸透しているか～  
第1回（2017年11月）調査

2018年10月



株式会社日本リサーチセンター

東京都中央区日本橋本町2-7-1 TEL:050-3785-0700 <https://www.nrc.co.jp/>

I. ユニバーサルデザイン理解・浸透度定点観測調査について	3
II. 調査実施概要	6
III. 調査票の設計	7
IV-1. 調査結果[性・年代別]	
【 1. 障害理解の実態 】	
1) 社会のあり方に対する考え	12
2) 障害・障害者に対する意識	
①ステレオタイプ	13
②心のバリア・距離感	14
3) 障害の捉え方（社会モデル、医学モデルへの賛同状況）	16
4) 性年代別 障害をめぐる意識・捉え方実態まとめ	17
【 2. 社会的障壁に接した場面での行動イメージ 】	18
【 3. 共生社会の実現度合評価 】	19
IV-2. 調査結果 [障害理解と行動イメージによるタイプ分類と障害の社会モデル獲得者の意識・行動実態まとめ]	
【 4. 障害理解と行動イメージ実態 再整理 】	
障害をめぐる意識・捉え方間の相関	22
①障害の社会モデル v s 医学モデルへの賛同	23
②障害者に対するステレオタイプ	24
③分離発想	25
④障害の社会モデル獲得者（タイプ分類）	26
【 5. 障害の社会モデル獲得者の意識・行動実態 まとめ 】	
①属性別出現率	27
②社会的障壁遭遇時の意見・行動	29
③行動共生社会の実現度合評価	30
■結果サマリー	31
■調査票（単純集計結果）	32

## ⑤ユニバーサルデザイン2020とは

2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会を契機として、世界に誇れる水準でユニバーサルデザイン化された公共施設・交通インフラを整備するとともに、心のバリアフリーを推進し、大会以降のレガシー（後世に残され、未来に引き継がれる財産）として残していくために、2017年2月、「ユニバーサルデザイン2020行動計画」が策定されました。

**「ユニバーサルデザイン」とは、障害の有無、年齢、性別、人種等にかかわらず、多様な人々が利用しやすいようあらかじめ都市や生活環境をデザインする考え方**です。

たとえば、建物の入口に段差があったら、つまずいたり、段差を乗り越えられない人もできます。しかし、最初から段差があると生じる問題を考えて段差のない設計にしていればこうした問題はおきません。段差を乗り越えられない状況は、つまずく人・乗り越えられない人の側の問題ではなく、段差のある建物をつくり、そのまま放置している社会の側に原因があると言えます。

「ユニバーサルデザイン2020行動計画」は、このユニバーサルデザインの考え方に基づく共生社会の実現を目指してとりまとめられています。すなわち、日本社会は、「障害の有無にかかわらず、女性も男性も、高齢者も若者も、すべての人がお互いの人権や尊厳を大切に支え合い、誰もが生き生きとした人生を享受することのできる共生社会を実現すること」を目指しています。そのためには、社会全体の障害への関心を高め、**「障害は個人の心身機能の障害と社会的障壁の相互作用によって創り出されているものであり、社会的障壁を取り除くのは社会の責務である」という「障害の社会モデル」**をすべての人が理解し、意識に反映させ、具体的な行動に結びつくまでに浸透させることが重要です。

▲ **ユニバーサルデザイン2020行動計画**/ユニバーサルデザイン2020関係閣僚会議（事務局：内閣官房東京オリンピック競技大会・東京パラリンピック競技大会推進本部）  
[https://www.kantei.go.jp/jp/singi/tokyo2020\\_suishin\\_honbu/udsuisin/index.html](https://www.kantei.go.jp/jp/singi/tokyo2020_suishin_honbu/udsuisin/index.html)

# I. ユニバーサルデザイン理解・浸透度定点観測調査について

## 🕒 調査実施の背景と目的

株式会社日本リサーチセンターは、内閣官房「平成28年度オリンピック・パラリンピック基本方針推進調査（ユニバーサルデザインの社会づくりに向けた調査）」に、調査事務局として参画しました。この事業は、ユニバーサルデザインの社会づくりに向けた試行プロジェクトを公募して実施し、効果や改善点を調査・分析するものでした。この事業を通じて、**現在の日本社会では、障害の理解及び「障害の社会モデル」の理解・実践はまだ十分なレベルに達しておらず、それを社会に浸透させていくことが喫緊の課題**であることが明らかになりました。

現在、オリンピック・パラリンピックの開催される2020年に向けて、全国各地で、「心のバリアフリー」を広める取り組み、誰もが安全で快適に移動できるユニバーサルデザインのまちづくりが加速化しています。そうした中、「**障害の社会モデル**」の考え方がどの程度人々に理解・浸透しているかを把握することは、**ユニバーサルデザイン社会の到達度を知るためのバロメーター**になります。

そこで弊社では、一般市民を対象とした調査を行い、「障害の社会モデル」の考え方の理解・浸透実態について、2020年前後の各年変化を明らかにすることで、調査会社として、共生社会実現の機運醸成に貢献できればと考えました。定点観測の手段としては、調査員による全国訪問留置調査である「日本リサーチセンターオムニバスサーベイ（NOS）」を利用し、2017年から2021年までの5年間計6回の調査を行います。

2020年東京オリンピック競技大会・東京パラリンピック競技大会を契機に、「障害の社会モデル」の理解・浸透が進めば、我が国の共生社会実現という東京大会のレガシーを証明するものになると考えます。

▲ 内閣官房「平成28年度オリンピック・パラリンピック基本方針推進調査（ユニバーサルデザインの社会づくりに向けた調査）」

[http://www.kantei.go.jp/jp/singi/tokyo2020\\_suishin\\_honbu/udsuisin/index.html](http://www.kantei.go.jp/jp/singi/tokyo2020_suishin_honbu/udsuisin/index.html)

調査報告書[http://www.kantei.go.jp/jp/singi/tokyo2020\\_suishin\\_honbu/udsuisin/pdf/201703\\_hokoku.pdf](http://www.kantei.go.jp/jp/singi/tokyo2020_suishin_honbu/udsuisin/pdf/201703_hokoku.pdf)

▲ 本調査において、「障害の社会モデル」の定義は、内閣官房「ユニバーサルデザイン2020行動計画」に基づきました。

▲ 本調査及びレポートにおいて、「障害」の表記については、2010年内閣府障がい者制度改革推進会議の「「障害」の表記に関する検討結果について」に基づき、「障害」を用いています。

# I. ユニバーサルデザイン理解・浸透度定点観測調査について

## 🕒 定点観測の計画

人々の「障害」に対する考え方（「障害の社会モデル」の認知・理解状況）、日本社会におけるバリアフリーの浸透実態、共生社会の実現度を測定するため、基本的に2021年まで同一設問で調査実施し定点観測していきます。

	調査実施予定時期	結果公表予定時期
第1回調査	2017年11月 <b>(実施済)</b>	2018年10月
第2回調査	2018年9月頃	2019年1月頃
第3回調査	2019年9月頃	2020年1月頃
第4回調査	2020年6月頃 ※開催年開催直前	
<b>東京オリンピック競技大会開催 2020年7月24日（金）～8月9日（日）</b> <b>東京パラリンピック競技大会開催 2020年8月25日（火）～9月6日（日）</b>		
第5回調査	2020年9月頃 ※開催年開催後	2021年1月頃
第6回調査	2021年9月頃	2022年1月頃

- ▲ 調査結果については、弊社ホームページにて公表します。
- ▲ 共生社会に向けた研究に関しては、無料で調査データを提供いたします（調査結果を引用等でお使いいただく場合には、弊社名の記載をお願いします）。

## II. 調査実施概要

### 🕒 日本リサーチセンター オムニバス サーベイ (NOS)

株式会社日本リサーチセンターでは、全国15～79歳男女1,200人を対象に、訪問留置オムニバス調査 (NOS) を、毎月定期的の実施しています。弊社訪問調査員が、層化無作為抽出した全国200地点で、住宅地図から無作為に抽出したお宅を訪問し、地域・都市規模と性年代が日本の人口構成に合致するように対象者に依頼する調査です。そのため、全体結果は、日本全国15～79歳男女の実態や意識をバランスよく反映したものとご覧になれます。

#### 調査方法

調査員による個別訪問留置調査 (NOSで実施)

#### 調査対象

全国の15～79歳の男女個人 1,200人

#### 抽出方法

層化3段階抽出

【地点抽出】 全国200地点を、大字・町丁目を抽出単位として、9地域ブロック×4都市規模で層化無作為抽出

【世帯抽出】 全国住宅地図データベースを抽出フレームとして、各抽出地点で訪問世帯を等間隔抽出

【個人抽出】 各層の母集団の性別・年代構成比に合わせて各地点で依頼回収する性別・年代を割り当てる(1地点6人ずつ)。

抽出世帯において、地点割当に合致する個人に依頼・回収する。

なお、母集団は2015年国勢調査人口を用いた。

#### 調査期間

2017年11月2日～11月14日

#### 調査実施主体

株式会社日本リサーチセンター

#### NOSの特長

調査パネルを使ってインターネットで簡単に情報収集できる時代になりましたが、日本リサーチセンターでは、45年以上にわたって、調査員を使った訪問留置、パネルモニターではない毎回抽出方式で、日本リサーチセンターオムニバスサーベイ「NOS」を継続実施し、代表性のある信頼の高いデータを提供してきました。

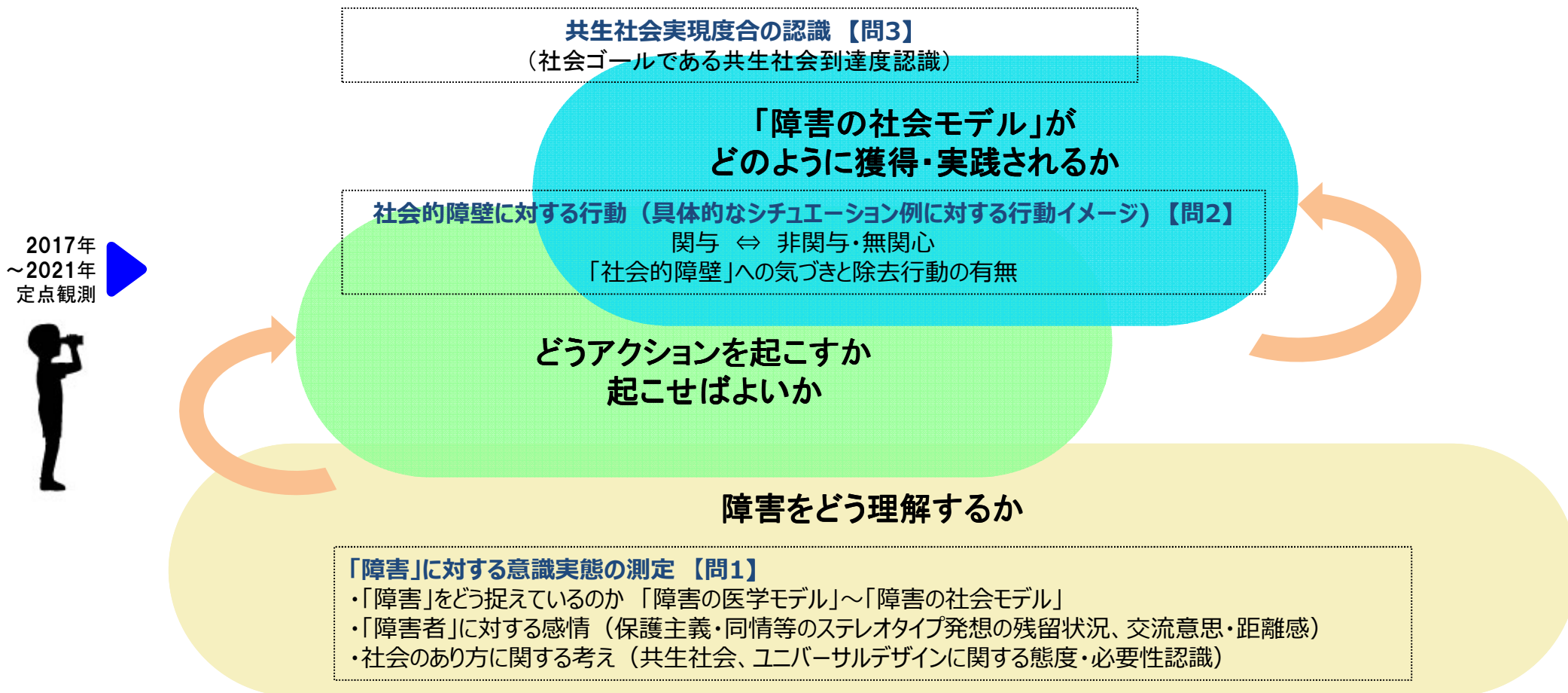
インターネット調査では、回収が難しい60代以上の対象者やインターネットを使っていない人の実態や意識を分析するのにも有用な手法と言えます。

### Ⅲ. 調査票の設計

調査票の設計にあたっては、内閣官房「平成28年度オリンピック・パラリンピック基本方針推進調査（ユニバーサルデザインの社会づくりに向けた調査）」における試行プロジェクト審査委員会委員長の慶應義塾大学経済学部 中野秦志教授にご助言いただきました。また、同調査でご協力をいただいた障害者団体にもご意見をお伺いし、一般財団法人全日本ろうあ連盟、全国手をつなぐ育成会連合会からいただいたご意見も踏まえて調査票を完成させました。ご協力に心より感謝申し上げます。

#### ☺「心のバリアフリー」の状態を測定するための3フェーズ

心のバリアフリーの状態を測るに際して、「障害の理解」、「アクション」、「障害の社会モデルの獲得・実践」という3つのフェーズを調査票に落とし込むことを念頭に置いて、設問を設計しました。





### Ⅲ. 調査票の設計

#### 障害をどう理解するか

問1では、社会のあり方に関する考えや、「障害者」に対する感情、「障害」の捉え方に関するa～iの9つの意見・認識に対する適合度合いを7段階で尋ね、「障害理解」の実態を測定しています。

「障害は、病気や外傷等から生じる個人の問題であり、障害の原因を除去・対処するには、治療や訓練等もつばら個人の適応努力が必要である」とする、従来の障害観である「**障害の医学モデル**」、そして「障害のある人はかわいそうであり、一方的に助けられるべき存在」といった**ステレオタイプ**が現在どの程度残留しているか、そして、「障害は、個人の心身機能の障害と社会的障壁の相互作用によってつくり出されているものであり、社会的障壁を取り除くのは社会の責務である」とする「**障害の社会モデル**」の考え方がどの程度浸透しているかを把握します。

最終的に我が国が目指す共生社会のゴールは、障害を「医学モデル」ではなく「社会モデル」で捉え、ステレオタイプを持たない人々（c・d・hで「どちらでもない」～「全くそう思わない」、iで「非常にそう思う」～「ややそう思う」）が社会に増えていくことにほかなりません。

#### 「障害」に対する意識実態の測定【問1】

【すべての方に】

問1 下記について、あなたの考えとして、もっとも近いと思われるものに○をつけてください。

	(それぞれ○は1つずつ)						
	非常に そう 思う	そう 思う	やや そう 思う	な ん ど か も あ ら ず	思 わ な い	思 わ な い	全 く そ う 思 わ な い
a) 障害の有無にかかわらず、女性も男性も、高齢者も若者も、すべての人がお互いの人権や尊厳を大切にし支え合い、誰もが生き生きとした人生を享受することのできる共生社会を実現すべきだと思う	1	2	3	4	5	6	7
b) 障害の有無、年齢、性別、人種等にかかわらず、多様な人々が利用しやすいよう、あらかじめ都市や生活環境をデザインすべきだと思う	1	2	3	4	5	6	7
c) 障害のある人は、一方的に助けられるべき存在だと思う	1	2	3	4	5	6	7
d) 障害のある人はかわいそうだと思う	1	2	3	4	5	6	7
e) 障害のある人が困っているときには、迷わず援助できる	1	2	3	4	5	6	7
f) 障害のある人を自分たちの仲間に入れることに抵抗感はない	1	2	3	4	5	6	7
g) 障害の問題は、自分にはかわかりがない	1	2	3	4	5	6	7
h) 障害は、病気や外傷等から生じる個人の問題であり、障害の原因を除去・対処するには、治療や訓練等もつばら個人の適応努力が必要である	1	2	3	4	5	6	7
i) 障害は、個人の心身機能の障害と社会的障壁の相互作用によってつくり出されているものであり、社会的障壁を取り除くのは社会の責務である	1	2	3	4	5	6	7

※『心のバリアフリー』に向けた汎用性のある研修プログラムの基本プログラム研修ツール「研修における評価アンケート集計資料」より  
※b-dは内閣官房「ユニバーサルデザイン2020行動計画」より e-i:文部科学省「障がい者制度改革推進会議資料」での定義より

探索領域	探索内容	調査項目	定義・出典
社会のあり方に関する考え (共生社会、ユニバーサルデザインに関する態度・必要性認識)	「共生社会」推進に対する態度	a) 障害の有無にかかわらず、女性も男性も、高齢者も若者も、すべての人がお互いの人権や尊厳を大切にし支え合い、誰もが生き生きとした人生を享受することのできる共生社会を実現すべきだと思う	(内閣官房「ユニバーサルデザイン2020行動計画」より)
	「ユニバーサルデザイン」のまちづくり推進に対する態度	b) 障害の有無、年齢、性別、人種等にかかわらず、多様な人々が利用しやすいよう、あらかじめ都市や生活環境をデザインすべきだと思う	
「障害」「障害者」に対する意識 (保護主義・同情等のステレオタイプの残留状況、交流意思・距離感)	ステレオタイプ (「一方的に助けられるべき存在」との認識)	c) 障害のある人は、一方的に助けられるべき存在だと思う	内閣官房「ユニバーサルデザイン2020行動計画」でのステレオタイプ意識例示より
	ステレオタイプ（「かわいそう」との感覚）	d) 障害のある人はかわいそうだと思う	
	心のバリア・距離感（援助行動）	e) 障害のある人が困っているときには、迷わず援助できる	『心のバリアフリー』に向けた汎用性のある研修プログラムの基本プログラム評価ツール「研修における評価アンケート集計資料」②より
	心のバリア・距離感（交流意思）	f) 障害のある人を自分たちの仲間に入れることに抵抗感はない	
	心のバリア・距離感（無関心）	g) 障害の問題は、自分にはかわかりがない	
「障害」の捉え方	「障害の医学モデル」の賛同認識	h) 障害は、病気や外傷等から生じる個人の問題であり、障害の原因を除去・対処するには、治療や訓練等もつばら個人の適応努力が必要である	文部科学省「障がい者制度改革推進会議資料」での定義より
	「障害の社会モデル」の賛同認識	i) 障害は、個人の心身機能の障害と社会的障壁の相互作用によってつくり出されているものであり、社会的障壁を取り除くのは社会の責務である	(内閣官房「ユニバーサルデザイン2020行動計画」での定義より)



### Ⅲ. 調査票の設計

#### どうアクションを起こすか・起こせばよいか

#### 社会的障壁に対する行動(具体的なシチュエーション例に対する行動イメージ)【問2】

問2は、具体的な社会的障壁のあるひとつのシチュエーション例を示し、このような状況に遭遇したときにどう考えるか、どのような行動を起こすと思うかを尋ねるケーススタディによる設問を作成しました。

選択肢1・10では関与・関心(無関心・無関与)の状況を把握し、選択肢2・3では「分隔」発想について把握しようとしたものです。

選択肢4～8は社会的障壁に対する気づき・考え・行動についての内容ですが、そのうち選択肢4・6・7はソフト面での障壁解消、選択肢5はハード面での障壁解消に関する方策例を落とし込みました。また、選択肢8は、社会的障壁に気付いた際に社会に対する自発行動を起こすかどうかを捉えようとして設計しました。

#### 「障害の社会モデル」がどのように獲得・実践されるか

問2 「バーゲンセールショッピングモールに多くの人が買物に来ていて、車いすのお客様、乳幼児連れのお客様が混雑の中で買物ができません。」  
このようなとき、あなたはどのように考えますか。(〇はいくつでも)

- 1 自分には関係ない・関わりたくない
- 2 車いすや乳幼児連れの人は混雑した場所に来ないほうがよい
- 3 車いすや乳幼児連れの人専用の買物エリアや通路、時間帯などを設けるのがよい
- 4 車いすや乳幼児連れのお客様の代わりに、店員が混雑した会場での買物を代行すべき
- 5 狭い通路の売り場をつくらないようにすべき
- 6 混雑時は、店側がお客様を順番に少しずつ店内に誘導するなど、誰もが買物できるようにすべき
- 7 近くにいる客として、自分が、車いすや乳幼児連れのの人に手助けが必要か聞き、実行する
- 8 店舗の環境づくりの不備・改善点を気づいたら、気づいた自分が店舗に提案・要求していく
- 9 その他( )
- 10 特に何も思わない

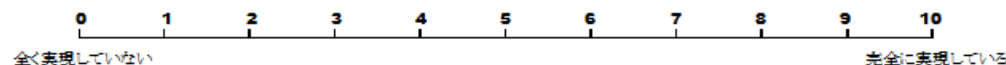
選択肢番号:	1	10	2	3	4	7	6	5	8
	自分には関係ない・関わりたくない	特に何も思わない	車いすや乳幼児連れの人は混雑した場所に来ないほうがよい	車いすや乳幼児連れの人専用の買物エリアや通路、時間帯などを設けるのがよい	車いすや乳幼児連れのお客様の代わりに、店員が混雑した会場での買物を代行するべき	近くにいる客として、自分が、車いすや乳幼児連れのの人に手助けが必要か聞き、実行する	混雑時は、店側がお客様を順番に少しずつ店内に誘導するなど、誰もが買物できるようにすべき	狭い通路の売り場をつくらないようにすべき	店舗の環境づくりの不備・改善点を気づいたら、気づいた自分が店舗に提案・要求していく
	無関心		分離による解決		ソフト面による解決		自発行動	ハード面による解決	
								障壁除去の為の社会への働きかけ	

#### 共生社会実現度合の認識【問3】

問3は、人々が、社会ゴールである共生社会の現在の到達度をどの程度と捉えているかを測定するための設問です。

0:全く実現していない から 10:完全に実現している の10点満点(11段階)スケールで定点観測していきます。

問3 いまの日本の社会は、どの程度、「障害の有無にかかわらず、女性も男性も、高齢者も若者も、すべての人がお互いの人権や尊厳を大切に支え合い、誰もが生き生きとした人生を享受することのできる共生社会」を実現していると思いますか。0~10までの11段階でお答えください。(〇は1つだけ)



#### 障害のある人との身近さ【問4】(回答対象者属性)

問4は、回答対象者の属性情報として、障害のある人との身近さを尋ねる設問です。

問4 あなたの身近に障害のある人がいますか。あてはまるものを全てお答えください。(〇はいくつでも)

- |      |      |      |      |          |       |
|------|------|------|------|----------|-------|
| 1 家族 | 2 友人 | 3 同僚 | 4 知人 | 5 その他( ) | 6 いない |
|------|------|------|------|----------|-------|



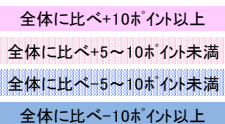
# IV-1. 調査結果 [性・年代別]

## 【1. 障害理解の実態】（問1）

## 【2. 社会的障壁に接した場面での行動イメージ】（問2）

## 【3. 共生社会の実現度合評価】（問3）

- ⊕ 図表中のnとは、比率算出の基数を表すもので、原則として回答総数、又は分類別の回答数を示している。
- ⊕ 百分比は、小数点第2位で四捨五入して、小数点第1位までを表示した。四捨五入したため、合計値が100%を前後することがある。
- ⊕ 図表中「-」は、回答者が皆無であることを示す。
- ⊕ 以降の図表中のハッチングは次の基準に基づく。



# 【 1. 障害理解の実態 】 1)社会のあり方に対する考え

共生社会推進、ユニバーサルデザインのまちづくり推進に賛同する人（そう思う計）は、全体で8割を超える。  
 （共生社会推進賛同者計88.4%、ユニバーサルデザインのまちづくり推進賛同者計84.8%）

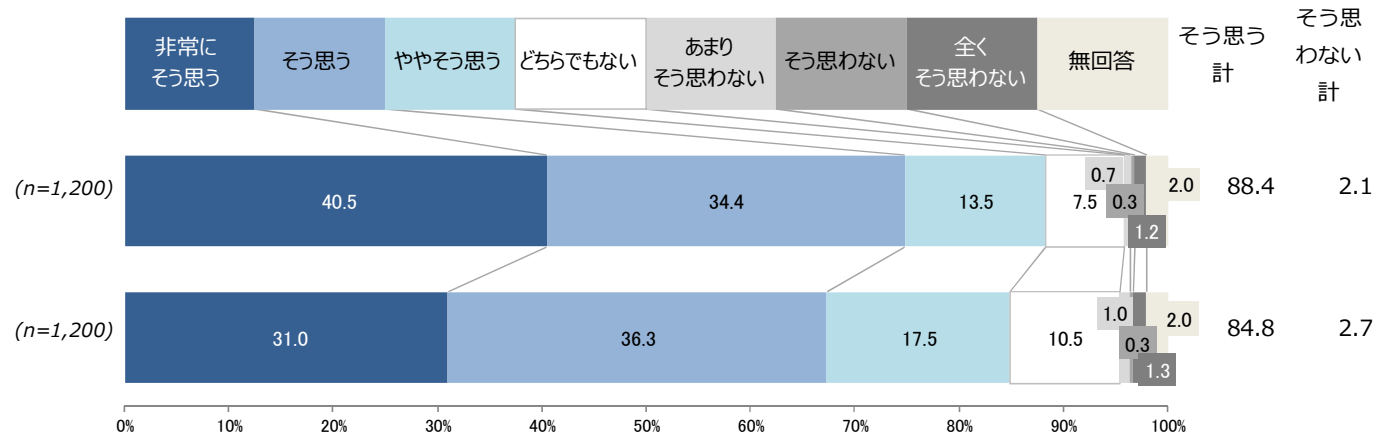
- ▲ 男性に比べて女性のほうが賛同者が多い。
- ▲ 女性30代以下の若年層に、「非常にそう思う」との強い賛同意識が高い傾向が見られる。

社会のあり方に対する考え 回答者全体 (%)

問1 下記について、あなたの考えとして、もっとも近いと思われるものに○をつけてください。

**a : 「共生社会」推進に対する態度**  
 a) 障害の有無にかかわらず、女性も男性も、高齢者も若者も、すべての人がお互いの人権や尊厳を大切に支え合い、誰もが生き生きとした人生を享受することのできる共生社会を実現すべきだと思う

**b : 「ユニバーサルデザイン」のまちづくり推進に対する態度**  
 b) 障害の有無、年齢、性別、人種等にかかわらず、多様な人々が利用しやすいよう、あらかじめ都市や生活環境をデザインすべきだと思う



## a 共生社会推進に対する態度 性年代別 (%)

a) 障害の有無にかかわらず、女性も男性も、高齢者も若者も、すべての人がお互いの人権や尊厳を大切に支え合い、誰もが生き生きとした人生を享受することのできる共生社会を実現すべきだと思う

	全 体	非常にそう 思う	そう 思う	ややそう 思 う	どちらでも な い	あまり さ う 思 わ な い	さ う 思 わ な い	全 く さ う 思 わ な い	無 回 答	さ う 思 う 計	さ う 思 わ な い 計
<b>全 体</b>	(n=1,200)	40.5	34.4	13.5	7.5	0.7	0.3	1.2	2.0	88.4	2.1
<b>男性小計</b>	(n=596)	34.7	35.6	14.6	9.9	1.0	0.2	1.5	2.5	84.9	2.7
15~19才	(n=36)	41.7	19.4	22.2	8.3	-	-	5.6	2.8	83.3	5.6
20~29才	(n=76)	27.6	27.6	23.7	18.4	-	-	1.3	1.3	78.9	1.3
30~39才	(n=97)	32.0	30.9	19.6	11.3	3.1	-	3.1	-	82.5	6.2
40~49才	(n=109)	34.9	31.2	16.5	12.8	0.9	-	0.9	2.8	82.6	1.8
50~59才	(n=92)	30.4	45.7	12.0	8.7	1.1	-	1.1	1.1	88.0	2.2
60~69才	(n=110)	37.3	42.7	9.1	7.3	-	-	0.9	2.7	89.1	0.9
70~79才	(n=76)	43.4	40.8	3.9	1.3	1.3	-	-	7.9	88.2	2.6
<b>女性小計</b>	(n=604)	46.2	33.3	12.4	5.1	0.3	0.3	0.8	1.5	91.9	1.5
15~19才	(n=35)	51.4	20.0	14.3	5.7	-	-	2.9	2.9	85.7	5.7
20~29才	(n=73)	50.7	32.9	13.7	2.7	-	-	-	-	97.3	-
30~39才	(n=97)	49.5	28.9	15.5	2.1	-	-	3.1	1.0	93.8	3.1
40~49才	(n=105)	40.0	38.1	12.4	7.6	-	1.0	-	1.0	90.5	1.0
50~59才	(n=91)	45.1	29.7	14.3	6.6	2.2	-	-	2.2	89.0	2.2
60~69才	(n=112)	48.2	38.4	8.9	3.6	-	-	0.9	-	95.5	0.9
70~79才	(n=91)	42.9	35.2	9.9	7.7	-	-	-	4.4	87.9	-

## b 「ユニバーサルデザイン」のまちづくり推進に対する態度 性年代別 (%)

b) 障害の有無、年齢、性別、人種等にかかわらず、多様な人々が利用しやすいよう、あらかじめ都市や生活環境をデザインすべきだと思う

	全 体	非常にそう 思う	そう 思う	ややそう 思 う	どちらでも な い	あまり さ う 思 わ な い	さ う 思 わ な い	全 く さ う 思 わ な い	無 回 答	さ う 思 う 計	さ う 思 わ な い 計
<b>全 体</b>	(n=1,200)	31.0	36.3	17.5	10.5	1.0	0.3	1.3	2.0	84.8	2.7
<b>男性小計</b>	(n=596)	25.2	37.6	19.0	12.1	1.7	-	2.0	2.5	81.7	3.7
15~19才	(n=36)	30.6	27.8	13.9	16.7	2.8	-	5.6	2.8	72.2	8.3
20~29才	(n=76)	28.9	30.3	18.4	17.1	1.3	-	1.3	2.6	77.6	2.6
30~39才	(n=97)	22.7	38.1	19.6	15.5	1.0	-	3.1	-	80.4	4.1
40~49才	(n=109)	24.8	31.2	27.5	11.9	1.8	-	0.9	1.8	83.5	2.8
50~59才	(n=92)	21.7	43.5	17.4	12.0	2.2	-	2.2	1.1	82.6	4.3
60~69才	(n=110)	23.6	40.0	20.0	9.1	1.8	-	2.7	2.7	83.6	4.5
70~79才	(n=76)	28.9	47.4	9.2	5.3	1.3	-	-	7.9	85.5	1.3
<b>女性小計</b>	(n=604)	36.8	35.1	16.1	8.9	0.3	0.7	0.7	1.5	87.9	1.7
15~19才	(n=35)	62.9	14.3	8.6	8.6	-	-	2.9	2.9	85.7	2.9
20~29才	(n=73)	46.6	32.9	15.1	5.5	-	-	-	-	94.5	-
30~39才	(n=97)	42.3	26.8	19.6	7.2	1.0	-	2.1	1.0	88.7	3.1
40~49才	(n=105)	32.4	33.3	21.0	10.5	-	1.9	-	1.0	86.7	1.9
50~59才	(n=91)	34.1	37.4	16.5	8.8	1.1	-	-	2.2	87.9	1.1
60~69才	(n=112)	28.6	46.4	15.2	7.1	-	1.8	0.9	-	90.2	2.7
70~79才	(n=91)	30.8	39.6	11.0	14.3	-	-	-	4.4	81.3	-

# 【 1. 障害理解の実態 】

## 2) 障害・障害者に対する意識

### ①ステレオタイプ

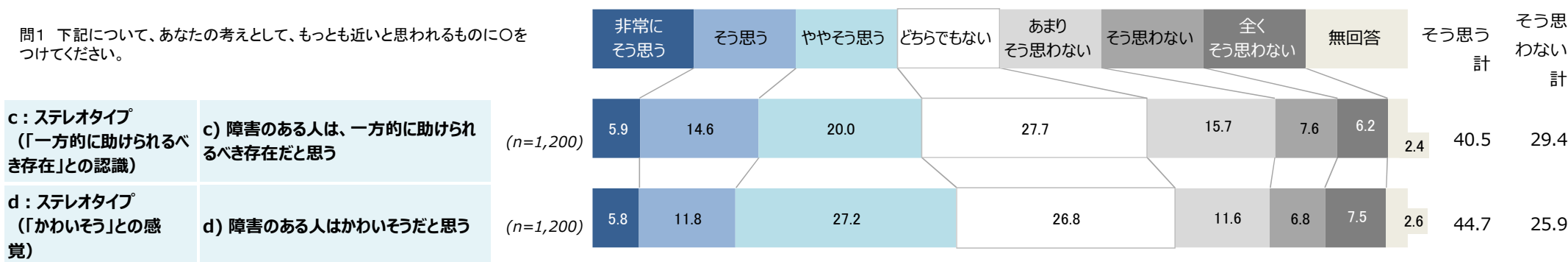
障害者を「一方的に助けられるべき存在」、「かわいそう」とするステレオタイプは、それぞれ約4割存在。

(「一方的に助けられるべき存在」そう思う計40.5%、「かわいそう」そう思う計44.7%)

- ▲ 「障害のある人は一方的に助けられるべき存在である」というステレオタイプ意見の賛同者（そう思う計）は、男女ともに70代が多い。逆に、男女ともに30代・40代はこのステレオタイプがやや低め（「そう思う計」が3割台）。
- ▲ 「障害のある人はかわいそうだと思う」というステレオタイプ意見への賛同者（そう思う計）は、男性40代以上では半数を超え、特に男性70代では66%にものぼる。男女ともに30代では少ない。
- ▲ 「一方的に助けられるべき存在」で、かつ「かわいそう」との意識が高いのは男性70代、ともに低いのは30代男女。

障害・障害者に対する意識 ①ステレオタイプ 回答者全体 (%)

問1 下記について、あなたの考えとして、もっとも近いと思われるものに○をつけてください。



c ステレオタイプ 一方的に助けられるべき存在 性年代別 (%)

d ステレオタイプ かわいそう 性年代別 (%)

c) 障害のある人は、一方的に助けられるべき存在だと思う

	全 体	非常に そう 思う	そう 思う	やや そう 思 う	ど ち ら で も な い	あ ま り そ う 思 わ な い	そ う 思 わ な い	全 く そ う 思 わ な い	無 回 答	そ う 思 う 計	そ う 思 わ な い 計
全 体 (n=1,200)		5.9	14.6	20.0	27.7	15.7	7.6	6.2	2.4	40.5	29.4
男性小計 (n=596)		6.2	13.9	20.0	29.0	14.3	7.9	5.5	3.2	40.1	27.7
15~19才 (n=36)		8.3	5.6	22.2	33.3	5.6	11.1	11.1	2.8	36.1	27.8
20~29才 (n=76)		11.8	6.6	21.1	30.3	13.2	9.2	3.9	3.9	39.5	26.3
30~39才 (n=97)		3.1	8.2	22.7	23.7	20.6	11.3	10.3	-	34.0	42.3
40~49才 (n=109)		7.3	14.7	12.8	33.9	18.3	4.6	6.4	1.8	34.9	29.4
50~59才 (n=92)		3.3	18.5	20.7	34.8	10.9	6.5	4.3	1.1	42.4	21.7
60~69才 (n=110)		7.3	17.3	19.1	27.3	14.5	7.3	4.5	2.7	43.6	26.4
70~79才 (n=76)		3.9	21.1	25.0	21.1	9.2	7.9	-	11.8	50.0	17.1
女性小計 (n=604)		5.6	15.2	20.0	26.3	17.1	7.3	6.8	1.7	40.9	31.1
15~19才 (n=35)		14.3	11.4	20.0	31.4	5.7	5.7	8.6	2.9	45.7	20.0
20~29才 (n=73)		6.8	9.6	26.0	28.8	17.8	5.5	4.1	1.4	42.5	27.4
30~39才 (n=97)		5.2	9.3	16.5	25.8	17.5	9.3	15.5	1.0	30.9	42.3
40~49才 (n=105)		3.8	10.5	21.0	29.5	21.0	8.6	4.8	1.0	35.2	34.3
50~59才 (n=91)		4.4	15.4	17.6	20.9	22.0	12.1	5.5	2.2	37.4	39.6
60~69才 (n=112)		3.6	25.0	18.8	21.4	18.8	6.3	6.3	-	47.3	31.3
70~79才 (n=91)		7.7	20.9	22.0	30.8	8.8	2.2	3.3	4.4	50.5	14.3

d) 障害のある人はかわいそうだと思う

	全 体	非常に そう 思う	そう 思う	やや そう 思 う	ど ち ら で も な い	あ ま り そ う 思 わ な い	そ う 思 わ な い	全 く そ う 思 わ な い	無 回 答	そ う 思 う 計	そ う 思 わ な い 計
全 体 (n=1,200)		5.8	11.8	27.2	26.8	11.6	6.8	7.5	2.6	44.7	25.9
男性小計 (n=596)		7.0	13.1	28.4	25.5	10.9	5.7	6.0	3.4	48.5	22.7
15~19才 (n=36)		8.3	2.8	27.8	27.8	13.9	8.3	8.3	2.8	38.9	30.6
20~29才 (n=76)		10.5	6.6	25.0	32.9	6.6	6.6	7.9	3.9	42.1	21.1
30~39才 (n=97)		1.0	11.3	20.6	25.8	22.7	9.3	8.2	1.0	33.0	40.2
40~49才 (n=109)		7.3	13.8	29.4	22.9	14.7	2.8	6.4	2.8	50.5	23.9
50~59才 (n=92)		4.3	13.0	34.8	31.5	7.6	2.2	4.3	2.2	52.2	14.1
60~69才 (n=110)		7.3	15.5	30.0	23.6	7.3	6.4	2.7	2.7	52.7	20.9
70~79才 (n=76)		13.2	22.4	30.3	15.8	2.6	5.3	1.3	9.2	65.8	9.2
女性小計 (n=604)		4.5	10.4	26.0	28.1	12.3	7.9	8.9	1.8	40.9	29.1
15~19才 (n=35)		5.7	2.9	28.6	25.7	5.7	2.9	25.7	2.9	37.1	34.3
20~29才 (n=73)		2.7	4.1	34.2	26.0	15.1	11.0	6.8	-	41.1	32.9
30~39才 (n=97)		7.2	11.3	16.5	32.0	13.4	4.1	14.4	1.0	35.1	32.0
40~49才 (n=105)		5.7	9.5	24.8	27.6	14.3	10.5	6.7	1.0	40.0	31.4
50~59才 (n=91)		2.2	8.8	27.5	23.1	15.4	13.2	6.6	3.3	38.5	35.2
60~69才 (n=112)		2.7	14.3	26.8	31.3	9.8	8.0	7.1	-	43.8	25.0
70~79才 (n=91)		5.5	15.4	27.5	28.6	8.8	3.3	5.5	5.5	48.4	17.6



# 【 1. 障害理解の実態 】

## 2) 障害・障害者に対する意識

### ②心のバリア・距離感

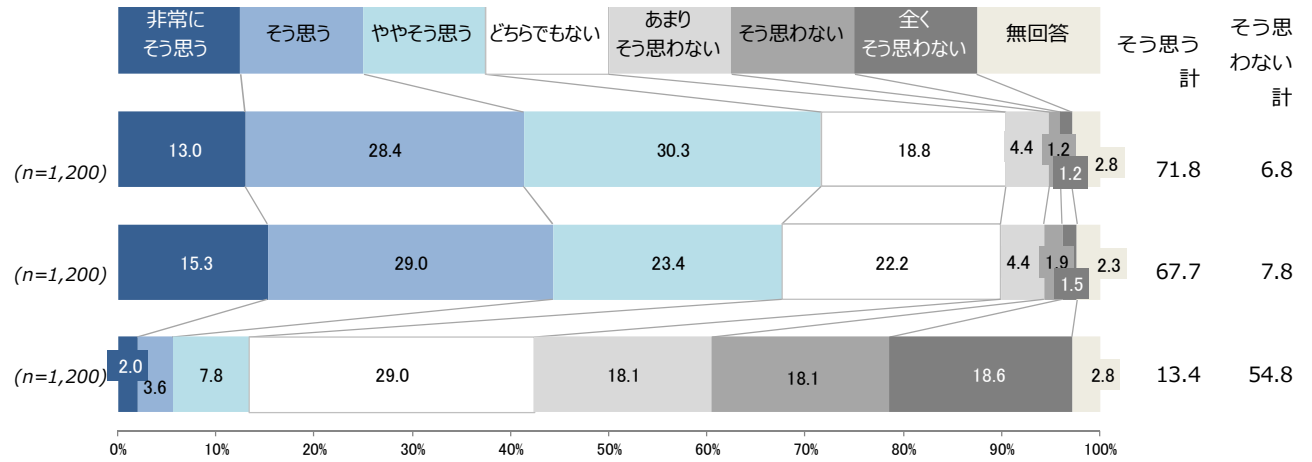
「迷わず援助できる」(そう思う計71.8%)、「自分たちの仲間に入れることに抵抗感はない」(同67.7%)との回答は約7割。  
 「障害の問題は、自分にはかかわりがない」と思う無関心層は全体の約1割(13.4%)に留まり、半数を超える人(そう思わない計54.8%)は自分にもかかわりがあると考えている。

- ▲ 「障害のある人が困っている時は迷わず援助できる」との回答が多いのは、女性60代・70代と男性60代(「そう思う計」が8割超)。一方、男性30代以下では「そう思う計」が他の性年代に比べ少ない。
- ▲ 「障害のある人を仲間に入れることに抵抗感はない」との回答が多いのは、男性60代、女性30代(「そう思う計」が7割半ば)。一方、男性30代以下で「そう思う計」は5割台で他の性年代に比べ少ない。
- ▲ 男性30代以下の層では、他層に比べ、援助行動が低く、仲間に入れることの抵抗感が高い。

障害・障害者に対する意識 ②心のバリア 回答者全体 (%)

問1 下記について、あなたの考えとして、もっとも近いと思われるものに○をつけてください。

e: 心のバリア (援助行動の抵抗感)	e) 障害のある人が困っているときには、迷わず援助できる
f: 心のバリア (交流意思)	f) 障害のある人を自分たちの仲間に入れることに抵抗感はない
g: 心のバリア (無関心)	g) 障害の問題は、自分にはかかわりがない



e 心のバリア 迷わず援助できる 性年代別 (%)

e) 障害のある人が困っているときには、迷わず援助できる

	全体	非常にそう思う	そう思う	ややそう思う	どちらでもない	あまりそう思わない	そう思わない	全くそう思わない	無回答	そう思う計	そう思わない計
全体 (n=1,200)		13.0	28.4	30.3	18.8	4.4	1.2	1.2	2.8	71.8	6.8
男性小計 (n=596)		11.1	30.0	27.5	20.3	5.5	1.2	1.2	3.2	68.6	7.9
15~19才 (n=36)		13.9	19.4	22.2	27.8	5.6	5.6	2.8	2.8	55.6	13.9
20~29才 (n=76)		15.8	21.1	25.0	21.1	11.8	-	1.3	3.9	61.8	13.2
30~39才 (n=97)		7.2	19.6	29.9	23.7	12.4	4.1	2.1	1.0	56.7	18.6
40~49才 (n=109)		12.8	22.0	36.7	20.2	4.6	-	0.9	2.8	71.6	5.5
50~59才 (n=92)		9.8	37.0	26.1	23.9	1.1	-	1.1	1.1	72.8	2.2
60~69才 (n=110)		8.2	42.7	30.0	13.6	1.8	-	0.9	2.7	80.9	2.7
70~79才 (n=76)		13.2	42.1	14.5	17.1	2.6	1.3	-	9.2	69.7	3.9
女性小計 (n=604)		14.9	26.8	33.1	17.2	3.3	1.2	1.2	2.3	74.8	5.6
15~19才 (n=35)		17.1	17.1	31.4	17.1	5.7	2.9	5.7	2.9	65.7	14.3
20~29才 (n=73)		15.1	15.1	34.2	26.0	8.2	-	-	1.4	64.4	8.2
30~39才 (n=97)		18.6	19.6	30.9	21.6	5.2	-	2.1	2.1	69.1	7.2
40~49才 (n=105)		13.3	20.0	34.3	24.8	1.0	3.8	-	2.9	67.6	4.8
50~59才 (n=91)		11.0	27.5	38.5	16.5	2.2	-	-	4.4	76.9	2.2
60~69才 (n=112)		13.4	42.0	33.9	6.3	1.8	0.9	1.8	4.4	89.3	4.5
70~79才 (n=91)		17.6	36.3	27.5	11.0	2.2	1.1	1.1	3.3	81.3	4.4

f 心のバリア 自分たちの仲間に入れることに抵抗感はない 性年代別 (%)

f) 障害のある人を自分たちの仲間に入れることに抵抗感はない

	全体	非常にそう思う	そう思う	ややそう思う	どちらでもない	あまりそう思わない	そう思わない	全くそう思わない	無回答	そう思う計	そう思わない計
全体 (n=1,200)		15.3	29.0	23.4	22.2	4.4	1.9	1.5	2.3	67.7	7.8
男性小計 (n=596)		12.4	30.5	21.0	24.7	4.5	2.2	1.8	2.9	63.9	8.6
15~19才 (n=36)		13.9	19.4	16.7	27.8	2.8	5.6	11.1	2.8	50.0	19.4
20~29才 (n=76)		18.4	18.4	17.1	30.3	7.9	3.9	-	3.9	53.9	11.8
30~39才 (n=97)		10.3	22.7	23.7	33.0	3.1	5.2	2.1	2.1	56.7	10.3
40~49才 (n=109)		16.5	25.7	22.9	27.5	3.7	0.9	0.9	1.8	65.1	5.5
50~59才 (n=92)		8.7	37.0	21.7	23.9	6.5	-	1.1	1.1	67.4	7.6
60~69才 (n=110)		11.8	40.9	23.6	14.5	4.5	0.9	0.9	2.7	76.4	6.4
70~79才 (n=76)		7.9	42.1	15.8	18.4	2.6	1.3	2.6	9.2	65.8	6.6
女性小計 (n=604)		18.0	27.5	25.8	19.7	4.3	1.7	1.2	1.8	71.4	7.1
15~19才 (n=35)		22.9	25.7	20.0	17.1	2.9	5.7	2.9	2.9	68.6	11.4
20~29才 (n=73)		17.8	20.5	26.0	24.7	6.8	4.1	-	-	64.4	11.0
30~39才 (n=97)		25.8	17.5	35.1	15.5	2.1	1.0	2.1	1.0	78.4	5.2
40~49才 (n=105)		13.3	26.7	30.5	23.8	3.8	-	-	1.9	70.5	3.8
50~59才 (n=91)		17.6	34.1	23.1	18.7	4.4	-	-	2.2	74.7	4.4
60~69才 (n=112)		16.1	32.1	23.2	19.6	4.5	0.9	1.8	1.8	71.4	7.1
70~79才 (n=91)		16.5	33.0	18.7	17.6	5.5	3.3	2.2	3.3	68.1	11.0



▲ 無関心は男女ともに若年層に高め。女性50~60代は関心が高め。

「障害の問題は、自分にはかかわりがない」との無関心の意識は、男女10代で比較的高い。一方、女性50代・60代、男性70代では「そう思わない」が6割超と高い。

g 心のバリア 自分にはかかわりがない 性年代別 (%)

g) 障害の問題は、自分にはかかわりがない

	全 体	非常にそう 思う	そう思う	ややそう思 う	どちらでもな い	あまりそう 思わない	そう思わな い	全くそう思 わない	無回答	そう思う 計	そう思わな い 計
<b>全 体</b>	(n=1,200)	2.0	3.6	7.8	29.0	18.1	18.1	18.6	2.8	13.4	54.8
<b>男性小計</b>	(n=596)	2.0	4.5	9.2	30.7	16.6	18.5	15.4	3.0	15.8	50.5
15~19才	(n=36)	8.3	5.6	16.7	27.8	11.1	11.1	16.7	2.8	30.6	38.9
20~29才	(n=76)	2.6	3.9	11.8	38.2	14.5	6.6	18.4	3.9	18.4	39.5
30~39才	(n=97)	1.0	6.2	10.3	29.9	18.6	19.6	14.4	-	17.5	52.6
40~49才	(n=109)	3.7	6.4	6.4	39.4	18.3	12.8	11.0	1.8	16.5	42.2
50~59才	(n=92)	1.1	3.3	9.8	30.4	18.5	19.6	16.3	1.1	14.1	54.3
60~69才	(n=110)	0.9	2.7	8.2	28.2	13.6	27.3	14.5	4.5	11.8	55.5
70~79才	(n=76)	-	3.9	6.6	17.1	18.4	26.3	19.7	7.9	10.5	64.5
<b>女性小計</b>	(n=604)	2.0	2.6	6.5	27.3	19.5	17.7	21.7	2.6	11.1	58.9
15~19才	(n=35)	8.6	2.9	11.4	28.6	14.3	17.1	14.3	2.9	22.9	45.7
20~29才	(n=73)	4.1	1.4	8.2	30.1	21.9	12.3	19.2	2.7	13.7	53.4
30~39才	(n=97)	1.0	5.2	13.4	27.8	18.6	13.4	17.5	3.1	19.6	49.5
40~49才	(n=105)	1.9	3.8	6.7	31.4	24.8	12.4	17.1	1.9	12.4	54.3
50~59才	(n=91)	1.1	2.2	2.2	26.4	16.5	22.0	27.5	2.2	5.5	65.9
60~69才	(n=112)	0.9	0.9	2.7	19.6	21.4	22.3	30.4	1.8	4.5	74.1
70~79才	(n=91)	1.1	2.2	4.4	29.7	15.4	23.1	19.8	4.4	7.7	58.2

# 【 1. 障害理解の実態 】 3) 障害の捉え方 (社会モデル、医学モデルへの賛同状況)

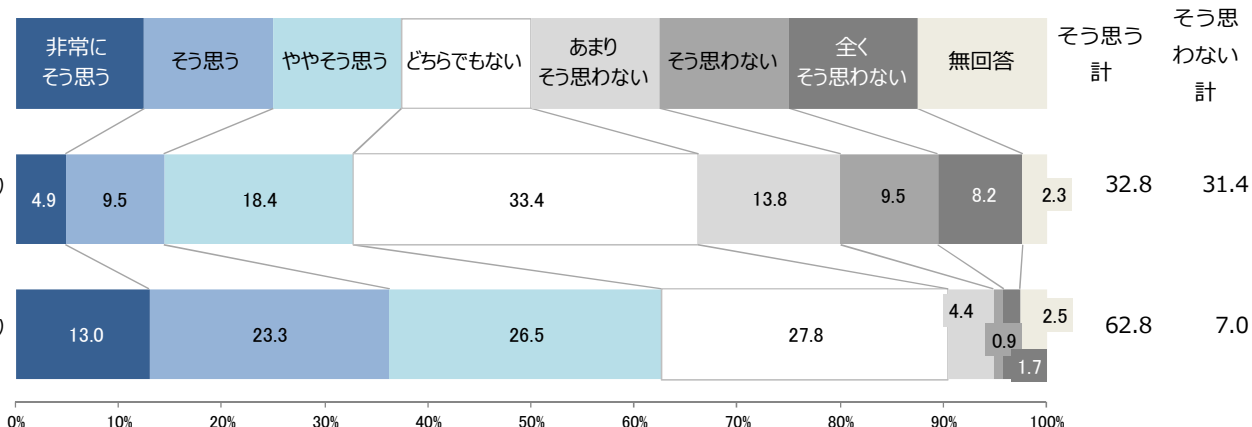
「障害の社会モデル」の賛同者は62.8%。  
 他方、障害を専ら個人の問題に帰結させる「医学モデル」の賛同者は32.8%。

- ▲ 「障害の社会モデル」は、男性50代以上、女性60代では賛同者（そう思う計）が7割を超え、他の性年代層に比べて高い。  
 一方、男女ともに30代以下の層では賛同者が5割以下と低め。
- ▲ 障害を専ら個人の問題とする「障害の医学モデル」は、女性に比べて男性で「そう思う計」が多い。また、男女ともに70代では4割前後と高い。

「障害」の捉え方 回答者全体 (%)

問1 下記について、あなたの考えとして、もっとも近いと思われるものに○をつけてください。

- 「障害の医学モデル」の賛同認識  
 h) 障害は、病気や外傷等から生じる個人の問題であり、障害の原因を除去・対処するには、治療や訓練等もつばら個人の適応努力が必要である
- 「障害の社会モデル」の賛同認識  
 i) 障害は、個人の心身機能の障害と社会的障壁の相互作用によって作り出されているものであり、社会的障壁を取り除くのは社会の責務である



h 「障害」の捉え方 障害の医学モデルへの賛同 性年代別 (%)

i 「障害」の捉え方 障害の社会モデルへの賛同 性年代別 (%)

h) 障害は、病気や外傷等から生じる個人の問題であり、障害の原因を除去・対処するには、治療や訓練等もつばら個人の適応努力が必要である

i) 障害は、個人の心身機能の障害と社会的障壁の相互作用によって作り出されているものであり、社会的障壁を取り除くのは社会の責務である

	全体	非常にそう思う	そう思う	ややそう思う	どちらでもない	あまりそう思わない	そう思わない	全くそう思わない	無回答	そう思う計	そう思わない計
<b>全体</b>	(n=1,200)	4.9	9.5	18.4	33.4	13.8	9.5	8.2	2.3	32.8	31.4
<b>男性小計</b>	(n=596)	4.5	11.6	20.5	30.0	13.4	9.9	6.9	3.2	36.6	30.2
15~19才	(n=36)	13.9	5.6	19.4	41.7	5.6	2.8	5.6	5.6	38.9	13.9
20~29才	(n=76)	6.6	10.5	17.1	36.8	11.8	5.3	7.9	3.9	34.2	25.0
30~39才	(n=97)	4.1	6.2	25.8	30.9	18.6	5.2	9.3	-	36.1	33.0
40~49才	(n=109)	7.3	9.2	17.4	33.0	16.5	11.9	2.8	1.8	33.9	31.2
50~59才	(n=92)	2.2	10.9	20.7	34.8	10.9	10.9	8.7	1.1	33.7	30.4
60~69才	(n=110)	1.8	11.8	24.5	24.5	14.5	13.6	6.4	2.7	38.2	34.5
70~79才	(n=76)	1.3	26.3	15.8	14.5	9.2	14.5	7.9	10.5	43.4	31.6
<b>女性小計</b>	(n=604)	5.3	7.5	16.4	36.8	14.1	9.1	9.4	1.5	29.1	32.6
15~19才	(n=35)	8.6	2.9	11.4	40.0	5.7	8.6	20.0	2.9	22.9	34.3
20~29才	(n=73)	5.5	5.5	15.1	42.5	19.2	5.5	6.8	-	26.0	31.5
30~39才	(n=97)	7.2	3.1	15.5	35.1	14.4	11.3	11.3	2.1	25.8	37.1
40~49才	(n=105)	2.9	11.4	16.2	31.4	19.0	9.5	8.6	1.0	30.5	37.1
50~59才	(n=91)	2.2	5.5	17.6	39.6	13.2	11.0	8.8	2.2	25.3	33.0
60~69才	(n=112)	6.3	3.6	19.6	34.8	13.4	10.7	11.6	-	29.5	35.7
70~79才	(n=91)	6.6	17.6	15.4	38.5	8.8	5.5	4.4	3.3	39.6	18.7

	全体	非常にそう思う	そう思う	ややそう思う	どちらでもない	あまりそう思わない	そう思わない	全くそう思わない	無回答	そう思う計	そう思わない計
<b>全体</b>	(n=1,200)	13.0	23.3	26.5	27.8	4.4	0.9	1.7	2.5	62.8	7.0
<b>男性小計</b>	(n=596)	12.6	26.5	25.2	25.8	4.2	1.0	1.7	3.0	64.3	6.9
15~19才	(n=36)	11.1	16.7	19.4	38.9	-	-	11.1	2.8	47.2	11.1
20~29才	(n=76)	13.2	18.4	25.0	30.3	7.9	-	1.3	3.9	56.6	9.2
30~39才	(n=97)	8.2	19.6	21.6	38.1	9.3	1.0	2.1	-	49.5	12.4
40~49才	(n=109)	14.7	21.1	27.5	29.4	2.8	1.8	0.9	1.8	63.3	5.5
50~59才	(n=92)	8.7	32.6	29.3	20.7	4.3	1.1	1.1	2.2	70.7	6.5
60~69才	(n=110)	15.5	33.6	24.5	20.0	0.9	1.8	0.9	2.7	73.6	3.6
70~79才	(n=76)	15.8	38.2	25.0	9.2	2.6	-	-	9.2	78.9	2.6
<b>女性小計</b>	(n=604)	13.4	20.0	27.8	29.6	4.6	0.8	1.7	2.0	61.3	7.1
15~19才	(n=35)	17.1	5.7	28.6	40.0	-	-	5.7	2.9	51.4	5.7
20~29才	(n=73)	13.7	11.0	28.8	37.0	2.7	-	2.7	4.1	53.4	5.5
30~39才	(n=97)	8.2	12.4	34.0	40.2	1.0	-	2.1	2.1	54.6	3.1
40~49才	(n=105)	16.2	21.9	23.8	31.4	4.8	1.0	-	1.0	61.9	5.7
50~59才	(n=91)	13.2	23.1	27.5	25.3	7.7	-	1.1	2.2	63.7	8.8
60~69才	(n=112)	14.3	25.9	30.4	18.8	8.0	0.9	1.8	-	70.5	10.7
70~79才	(n=91)	13.2	28.6	22.0	24.2	4.4	3.3	1.1	3.3	63.7	8.8

# 【 1. 障害理解の実態 】 4) 性年代別 障害をめぐる意識・捉え方実態まとめ

性年代別の意識・捉え方の実態について、「そう思う計」の比率を以下にまとめた（再掲）。

- ▲ 「障害の社会モデル」は、男性50代以上、女性60代では賛同者（そう思う計）が7割を超えて高い。  
60代男女では援助行動も高く、仲間に入れる抵抗感も低い。男性40代以上の層に「障害者はかわいそう」との意識、女性60代以上、70代男女に「一方的に助けられるべき存在」との意識が他層より高い。
- ▲ 男女ともに30代以下の層で「障害の社会モデル」に対する賛同意識が他層に比べて相対的に低い。  
男性30代以下の層は共生社会、ユニバーサルデザインのまちづくりに対する賛同意識も相対的に低めであるほか、援助行動も低く、仲間に入れることの抵抗感が高い。また、10代男女では「かわからない」という意識が高い。30代男女にはステレオタイプが低い傾向も見られる。

## 障害をめぐる意識・捉え方実態 そう思う（計）比率 性年代別（％）

問1 下記について、あなたの考えとして、もっとも近いと思われるものに○をつけてください。

そう思う 計比率（％）	社会のあり方に関する考え	障害・障害者に対する意識				「障害の捉え方」				
		「共生社会」推進に対する態度	ユニバーサルデザインのまちづくり推進に対する態度	ステレオタイプ意識	心のバリア・距離感	「障害の医学モデル」への共感・賛同認識	「障害の社会モデル」への共感・賛同認識			
全体	全体	a) 障害の有無にかかわらず、女性も男性も、高齢者も若者も、すべての人がお互いの人権や尊厳を大切に支え合い、誰もが生き生きとした人生を享受することのできる共生社会を実現すべきだと思う	b) 障害の有無、年齢、性別、人種等にかかわらず、多様な人々が利用しやすいよう、あらかじめ都市や生活環境をデザインすべきだと思う	c) 障害のある人は、一方的に助けられるべき存在だと思う	d) 障害のある人はかわいそうだと思う	e) 障害のある人が困っているときには、迷わず援助できる	f) 障害のある人を自分たちの仲間に入れることに抵抗感はない	g) 障害の問題は、自分にはかわからない	h) 障害は、病気や外傷等から生じる個人の問題であり、障害の原因を除去・対処するには、治療や訓練等もっぱら個人の適応努力が必要である	i) 障害は、個人の心身機能の障害と社会的障壁の相互作用によってつくり出されているものであり、社会的障壁を取り除くのは社会の責務である
全体	(n=1,200)	88.4	84.8	40.5	44.7	71.8	67.7	13.4	32.8	62.8
男性小計	(n=596)	84.9	81.7	40.1	48.5	68.6	63.9	15.8	36.6	64.3
15~19才	(n=36)	83.3	72.2	36.1	38.9	55.6	50.0	30.6	38.9	47.2
20~29才	(n=76)	78.9	77.6	39.5	42.1	61.8	53.9	18.4	34.2	56.6
30~39才	(n=97)	82.5	80.4	34.0	33.0	56.7	56.7	17.5	36.1	49.5
40~49才	(n=109)	82.6	83.5	34.9	50.5	71.6	65.1	16.5	33.9	63.3
50~59才	(n=92)	88.0	82.6	42.4	52.2	72.8	67.4	14.1	33.7	70.7
60~69才	(n=110)	89.1	83.6	43.6	52.7	80.9	76.4	11.8	38.2	73.6
70~79才	(n=76)	88.2	85.5	50.0	65.8	69.7	65.8	10.5	43.4	78.9
女性小計	(n=604)	91.9	87.9	40.9	40.9	74.8	71.4	11.1	29.1	61.3
15~19才	(n=35)	85.7	85.7	45.7	37.1	65.7	68.6	22.9	22.9	51.4
20~29才	(n=73)	97.3	94.5	42.5	41.1	64.4	64.4	13.7	26.0	53.4
30~39才	(n=97)	93.8	88.7	30.9	35.1	69.1	78.4	19.6	25.8	54.6
40~49才	(n=105)	90.5	86.7	35.2	40.0	67.6	70.5	12.4	30.5	61.9
50~59才	(n=91)	89.0	87.9	37.4	38.5	76.9	74.7	5.5	25.3	63.7
60~69才	(n=112)	95.5	90.2	47.3	43.8	89.3	71.4	4.5	29.5	70.5
70~79才	(n=91)	87.9	81.3	50.5	48.4	81.3	68.1	7.7	39.6	63.7

## 【2. 社会的障壁に接した場面での行動イメージ】

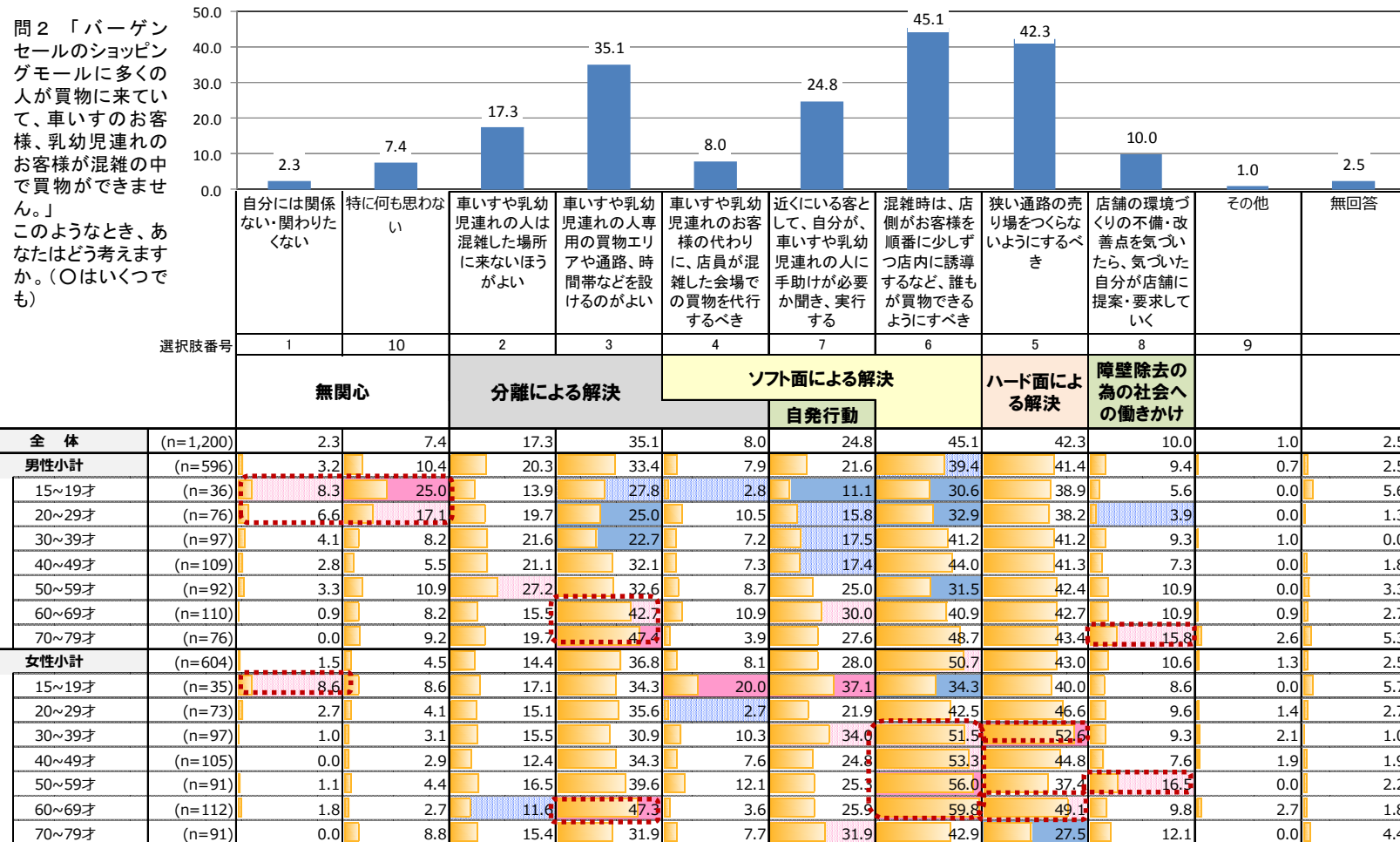
社会的障壁が発生しているシチュエーション例に対する行動イメージ（複数回答）としては、「混雑時は、店側がお客様を順番に少しずつ店内に誘導するなど、誰もが買物できるようにすべき」（45.1%）、「狭い通路の売り場をつくらないようにすべき」（42.3%）が4割超で、ソフト面・ハード面両面での解決策が回答上位。

次いで高いのは、「車いすや乳幼児連れの人専用の買物エリアや通路、時間帯などを設けるのがよい」（35.1%）で、車いすや乳幼児連れの客を分離するという共生社会・ユニバーサルデザインに反する方法を選ぶ人が3割以上にのぼっている。

「店舗の環境づくりの不備・改善点を気づいたら、気づいた自分が店舗に提案・要求していく」という、社会的障壁除去のために自ら社会に働きかける行動を選択しているのは、全体で1割（10.0%）にとどまる。

- ▲ 障壁除去のための社会への働きかけの選択率が比較的高めであったのは、男性70代(16%)、女性50代(17%)。
- ▲ ハード面による解決を図ることを考える人が比較的多いのは女性30代・60代(5割前後)。女性70代では3割未満と低い。男性は年代差が少なくいずれの年代も4割前後。
- ▲ 順番に誘導するソフト面での解決を考える人が比較的多いのは女性30～60代（いずれも5割超）。一方、10代男女、男性20代・50代では3割台と低い。
- ▲ 「エリアや時間帯を分離」との分離発想が高いのは、60代男女・男性70代（4割超）。男性30代以下はこの発想が2割台。
- ▲ 10代男女・男性20代は無関心層が比較的多い。

社会的障壁遭遇時の意見・選択行動の状況（複数回答） 性年代別



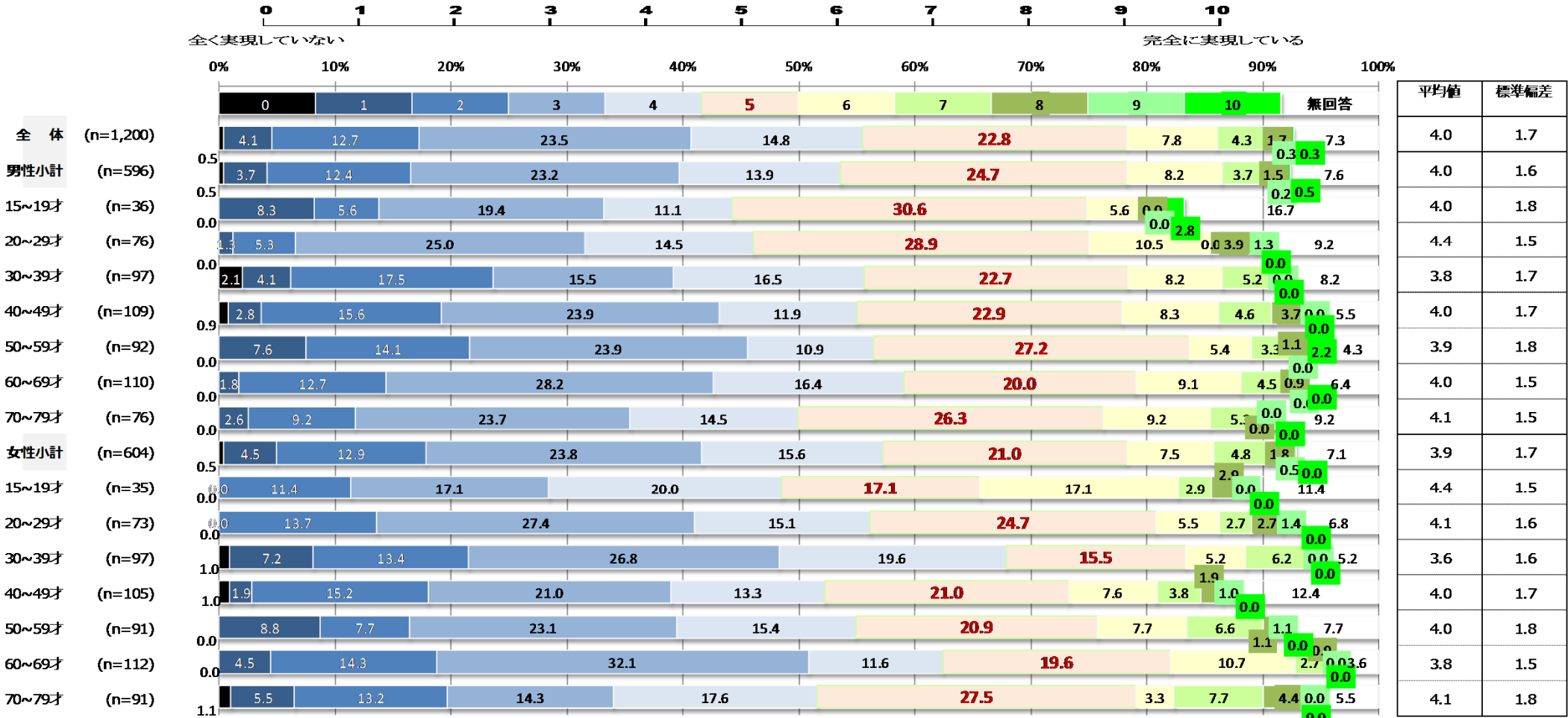
# 【3. 共生社会の実現度合評価】

2017年11月時点での日本の共生社会実現レベル(平均値) は10点満点中4.0点。「3」と「5」の回答が各2割強と多いが、「6」以上を回答した人は14%にとどまる。

▲ 男性20代及び女性10代で実現レベル評価が高め。30代男女、60代女性で低め。

共生社会の実現度合評価 性年代別(%)

問3 いまの日本の社会は、どの程度、「障害の有無にかかわらず、女性も男性も、高齢者も若者も、すべての人がお互いの人権や尊厳を大切に支え合い、誰もが生き生きとした人生を享受することのできる共生社会」を実現していると思いますか。0~10までの11段階でお答えください。(○は1つだけ)







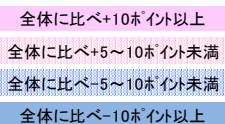
## IV-2. 調査結果

### [障害理解と行動イメージによるタイプ分類と 障害の社会モデル獲得者の意識・行動実態まとめ]

#### 【4. 障害理解と行動イメージ実態 再整理】

#### 【5. 障害の社会モデル獲得者の意識・行動実態 まとめ】

- ⊕ 図表中のnとは、比率算出の基数を表すもので、原則として回答総数、又は分類別の回答数を示している。
- ⊕ 百分比は、小数点第2位で四捨五入して、小数点第1位までを表示した。四捨五入したため、合計値が100%を前後することがある。
- ⊕ 図表中「-」は、回答者が皆無であることを示す。
- ⊕ 以降の図表中のハッチングは次の基準に基づく。



# 【 4. 障害理解と行動イメージ実態 再整理 】 障害をめぐる意識・捉え方間の相関

障害をめぐるa~iの9つの意見・認識に対する適合評価（7段階評価）を用いて、意見・意識間の相関係数（単相関）を算出し、各意識・捉え方の関係性を整理した。  
 （相関係数0.7以上：強い相関あり、0.4~0.7：相関あり、0.2~0.4：弱い相関あり、0.2未満：ほとんど相関なしとして捉えた。）

## 【各意識間の関係性】

- ▲ 障害の社会モデルは、共生社会、ユニバーサルデザインのまちづくりに対する推進賛同意識(0.40~0.45)と相関あり。  
 また、援助行動、仲間に入れる抵抗感がないこともやや相関あり(0.33~0.36)。
- ▲ 障害の医学モデルとは相関なし(0.10 負の相関もなし)。
- ▲ 障害の医学モデルは、無関心（障害の問題は自分にはかわりがない）とやや相関あり(0.30)。
- ▲ 共生社会推進(a)とユニバーサルデザイン推進(b)は0.73という高い相関が見られる。

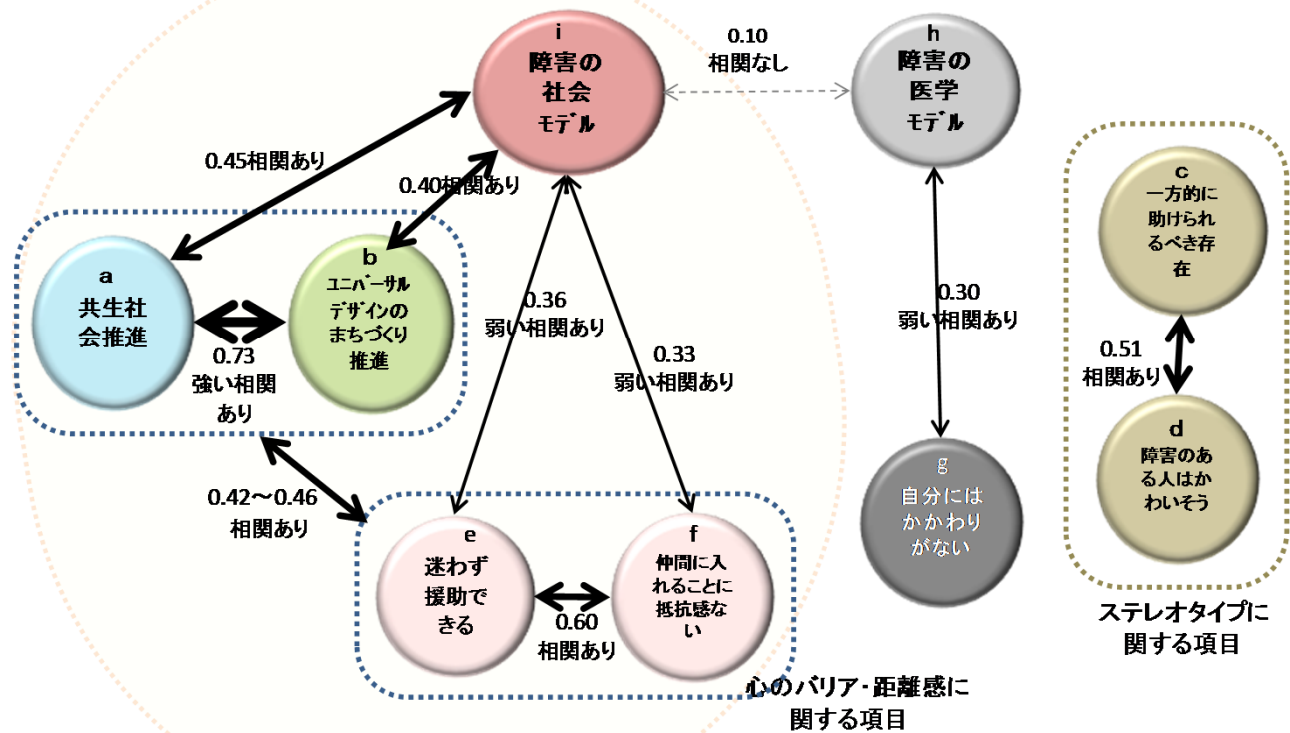
## 【各尺度の内部相関の確認】

- ▲ 「障害のある人が困っているときには、迷わず援助できる」(e)と「障害のある人を自分たちの仲間に入れることに抵抗感はない」(f)は、0.60の相関が見られ、心のバリア・距離感を表す尺度として関係性が強いことが確認できる。
- ▲ 「障害のある人は、一方的に助けられるべき存在だと思ふ」(c)と「障害のある人はかわいそうだと思ふ」(d)は、0.51の相関が見られ、2つのステレオタイプを表す尺度として比較的關係性が強いことが確認できる。

相関係数

≤ -0.3 0.3 ≤

問 1 下記について、あなたの考えとして、もっとも近いと思われるものに○をつけてください。		a	b	c	d	e	f	g	h	i
社会のあるり方に関する考え	「共生社会」推進に対する態度	1.00	0.73	0.23	0.14	0.46	0.42	-0.15	0.00	0.45
	ユニバーサルデザインのまちづくり推進に対する態度	0.73	1.00	0.22	0.11	0.42	0.43	-0.09	0.00	0.40
障害・障害者に対する意識	ステレオタイプ意識									
	c) 障害のある人は、一方的に助けられるべき存在だと思ふ	0.23	0.22	1.00	0.51	0.28	0.16	0.12	0.21	0.23
	d) 障害のある人はかわいそうだと思ふ	0.14	0.11	0.51	1.00	0.11	-0.02	0.13	0.18	0.16
心のバリア・距離感	e) 障害のある人が困っているときには、迷わず援助できる	0.46	0.42	0.28	0.11	1.00	0.60	-0.14	0.08	0.36
	f) 障害のある人を自分たちの仲間に入れることに抵抗感はない	0.42	0.43	0.16	-0.02	0.60	1.00	-0.17	0.01	0.33
	g) 障害の問題は、自分にはかわりがない	-0.15	-0.09	0.12	0.13	-0.14	-0.17	1.00	0.30	-0.07
「障害の捉え方」	「障害の医学モデル」への共感・賛同認識	0.00	0.00	0.21	0.18	0.08	0.01	0.30	1.00	0.10
	「障害の社会モデル」への共感・賛同認識	0.45	0.40	0.23	0.16	0.36	0.33	-0.07	0.10	1.00



# 【 4. 障害理解と行動イメージ実態 再整理 】 ①障害の社会モデルvs医学モデルへの賛同

## 障害の社会モデルに賛同し、かつ医学モデルに賛同していない人 : 35.8%

今回の調査では、内閣官房による**障害の社会モデル**の定義「障害は、個人の心身機能の障害と社会的障壁の相互作用によって作り出されているものであり、社会的障壁を取り除くのは社会の責務である」と、文部科学省による**障害の医学モデル**の定義「障害は、病気や外傷等から生じる個人の問題であり、障害の原因を除去・対処するには、治療や訓練等もつぱら個人の適応努力が必要である」を用いて調査を行った。

この2つの障害モデル定義において、社会モデルの考え方が正しく理解・獲得されているならば、この医学モデルの考え方は相反するものとして捉えられるはずである。

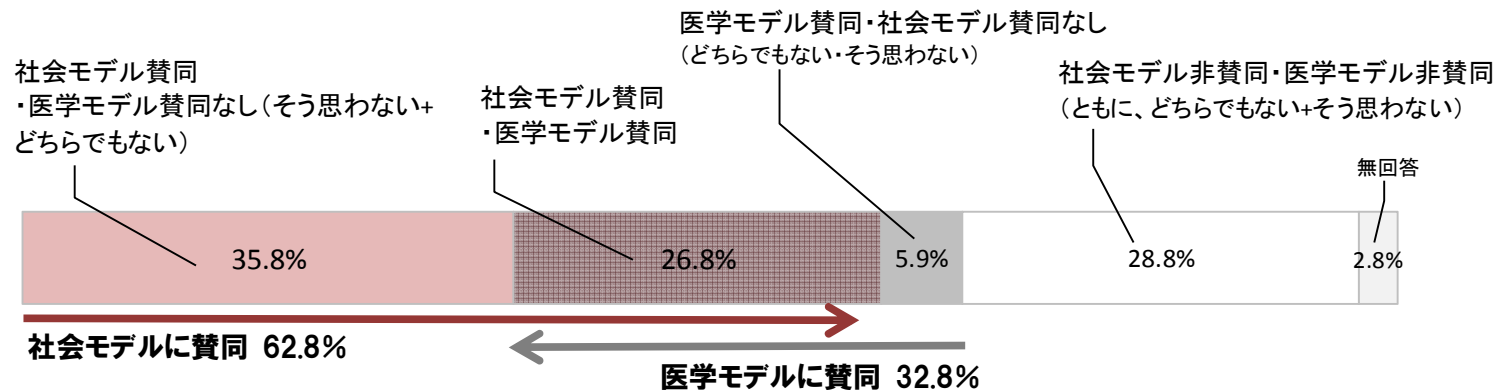
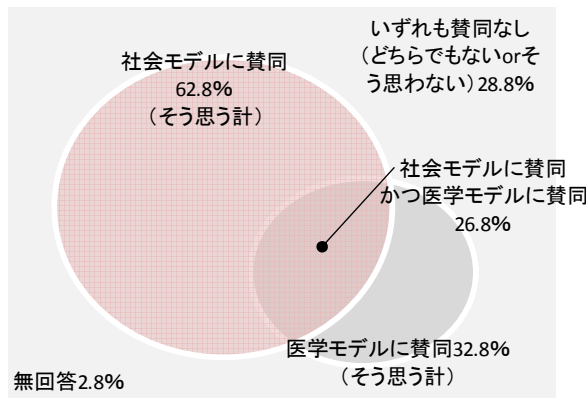
社会モデル、医学モデルに対する賛同・不賛同の回答を組み合わせてみると、社会モデルへの賛同者は全体で62.8%であるが、その中で、医学モデルに賛同しない（「そう思わない」、または「どちらでもない」）人は35.8%に限られている。残り26.8%は社会モデル・医学モデルともに賛同しており、社会モデルが正確には理解されていない。

医学モデルに賛同し、社会モデルに賛同していない（「そう思わない」、または「どちらでもない」）人は、5.9%、社会モデル、医学モデルともに賛同していない（「そう思わない」、または「どちらでもない」）人も28.8%存在している。

社会モデル、医学モデル両者間の相関は0.1で、相関はない（P22）。

「障害」の捉え方	h : 「障害の医学モデル」の賛同認識	h) 障害は、病気や外傷等から生じる個人の問題であり、障害の原因を除去・対処するには、治療や訓練等もつぱら個人の適応努力が必要である	文部科学省 障がい者制度改革推進会議資料での定義より
	i : 「障害の社会モデル」の賛同認識	i) 障害は、個人の心身機能の障害と社会的障壁の相互作用によって作り出されているものであり、社会的障壁を取り除くのは社会の責務である	(内閣官房「エバー-デザイン2020 行動計画」での定義より

障害の社会モデル・障害の医学モデルに対する態度 (%)



# 【 4. 障害理解と行動イメージ実態 再整理 】 ②障害者に対するステレオタイプ

## 「一方的に助けられるべき存在」、「かわいそう」とのいずれかのステレオタイプを持つ人： 57.2%

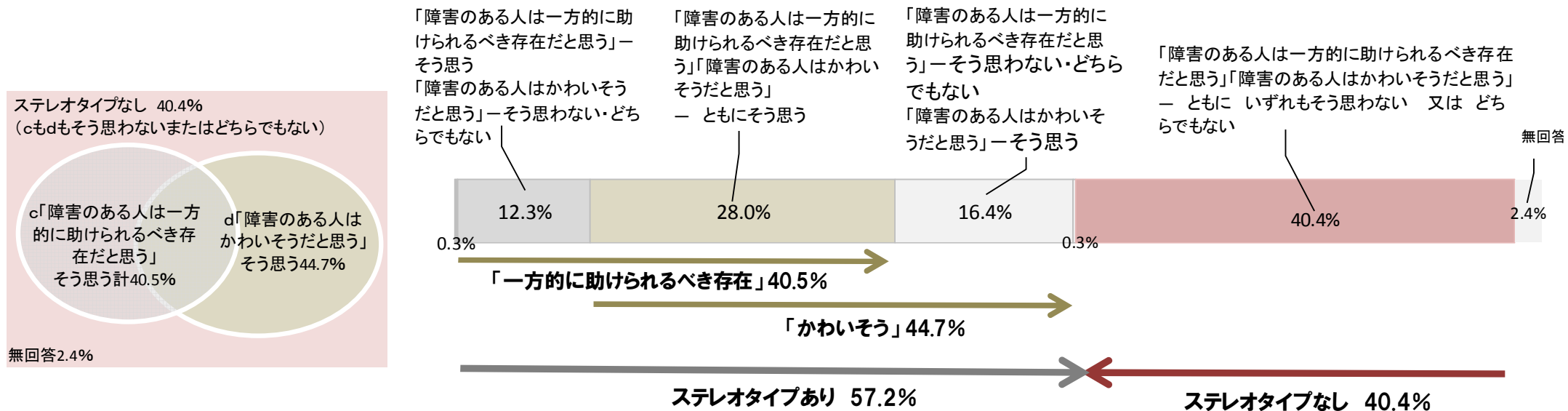
問1では、内閣官房「ユニバーサルデザイン2020行動計画」に例示されている障害のある人に対する2つのステレオタイプについても確認した。「障害のある人は、一方的に助けられるべき存在だと思う」と、「障害のある人はかわいそうだと思う」という2つのステレオタイプ意識の重なり方は以下のとおり。

障害者に対して、「一方的に助けられるべき存在」と考える人は40.5%（「そう思う」計）、「かわいそう」と考える人は44.7%（「そう思う」計）で、それぞれ4割程度存在しているが、この2つのステレオタイプ意識いずれかがある人は全体の約6割(57.2%)である。他方、ステレオタイプがない人（ともに、「そう思わない」または「どちらでもない」と回答）は全体の4割（40.4%）である。

「助けられるべき存在」、「かわいそう」との2つのステレオタイプ間の相関は0.51で、相関がある（P22）。

c : ステレオタイプ （「一方的に助けられるべき存在」との認識）	c) 障害のある人は、一方的に助けられるべき存在だと思う	内閣官房「ユニバーサルデザイン2020行動計画」でのステレオタイプ意識例示より
d : ステレオタイプ（「かわいそう」との感覚）	d) 障害のある人はかわいそうだと思う	

障害者に対するステレオタイプの状況 (%)



# 【 4. 障害理解と行動イメージ実態 再整理 】 ③分離発想

## 社会的障壁遭遇時に分離発想に基づく解決策を選択した人：47.3%

問2では社会的障壁遭遇シチュエーション例を示し、対象者が考える解決策を選択（複数回答）させる設問である。選択肢の中には、「車いすや乳幼児連れの方は混雑した場所に来ないほうがよい」、「車いすや乳幼児連れの方専用の買物エリアや通路、時間帯などを設けるのがよい」という2つの分離発想に基づく内容を設定した。

「車いすや乳幼児連れの方は混雑した場所に来ないほうがよい」との回答は17.3%、「車いすや乳幼児連れの方専用の買物エリアや通路、時間帯などを設けるのがよい」を選択した人は35.1%であり、このいずれかの分離発想による解決策の選択率は合計47.3%であった。いずれの分離発想の解決策も選択しなかったのは、50.3%であった。

※「車いすや乳幼児連れのお客様の代わりに、店員が混雑した会場での買物を代行するべき」という内容も、完全代行であれば当事者が買い物しないという想定であり分離による解決に当たると考えられるが、ここでは、明らかに買い物場面を分離させる内容を含む当該2設問に関する重なりについて再整理した。

社会的障壁遭遇時の分離発想の状況（複数回答）（%）

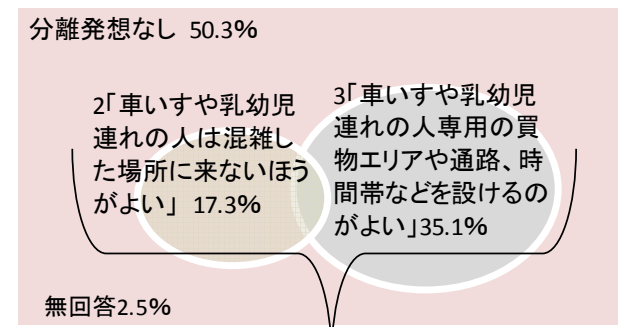
- 2「車いすや乳幼児連れの方は混雑した場所に来ないほうがよい」
- 3「車いすや乳幼児連れの方専用の買物エリアや通路、時間帯などを設けるのがよい」



2「混雑した場所に来ないほうがよい」に賛同 17.3%

3「専用の買物エリアや通路、時間帯などを設けるのがよい」に賛同 35.1%

いずれかの分離発想あり 計47.3%





# 【 4. 障害理解と行動イメージ実態 再整理 】 ④障害の社会モデル獲得者(タイプ分類)

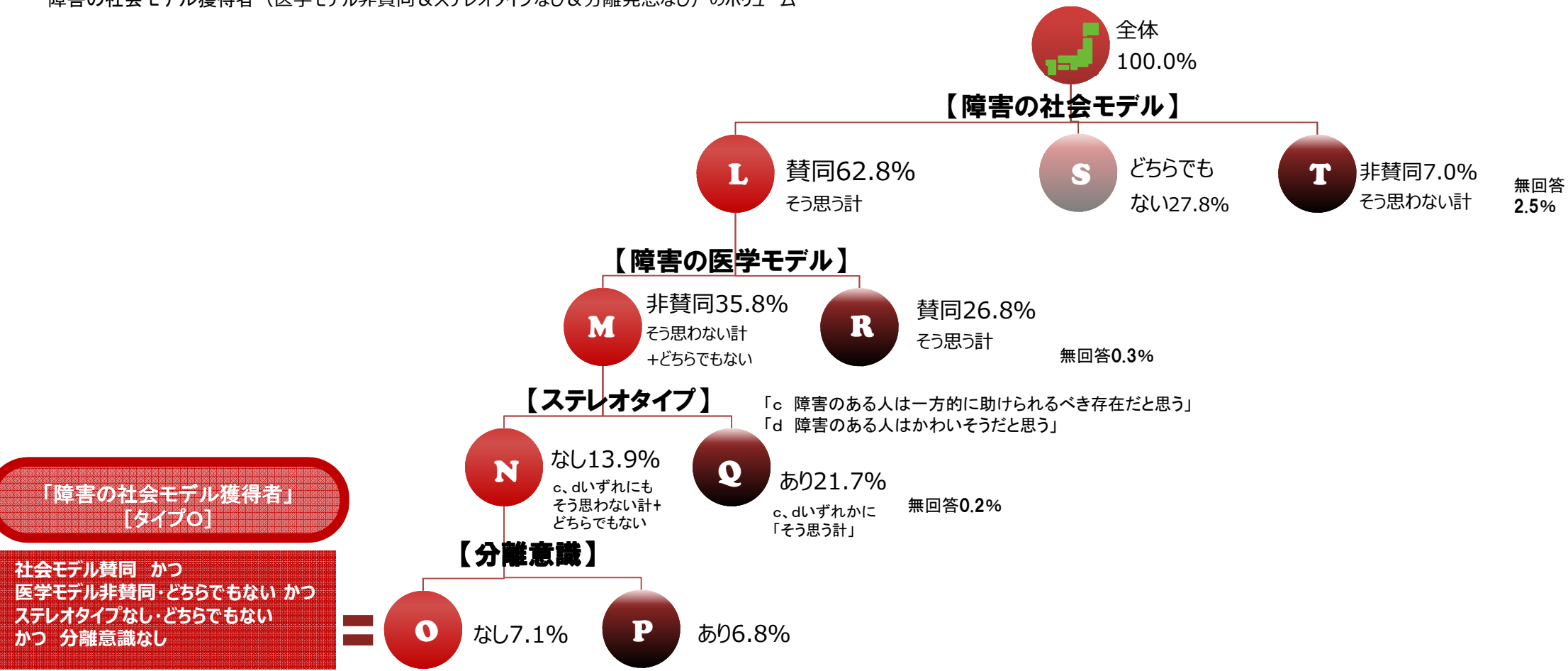
## 障害の社会モデル獲得者（医学モデル非賛同&ステレオタイプなし&分離発想なし）【グループO】：7.1%

4①で社会モデルと医学モデルの賛同状況、②でステレオタイプの状況、③で分離意識を見てきたが、この3つを組み合わせると、障害の社会モデルの考え方の獲得実態を再整理する。

障害の社会モデルの考え方単独への賛同者（問1 i に「そう思う」と回答した人計）は全体で62.8%と多数を占めているが、そのうち、医学モデルには賛同がなく（「そう思わない」または「どちらでもない」）、ステレオタイプがなく（「そう思わない」または「どちらでもない」）、社会的障壁遭遇時にも分離発想に基づく解決策を選択していない人は、全体の**7.1%**にとどまる(グループO)。

障害の社会モデルの考え方単独への賛同者においても、**大半の人（P・Q・R；62.8-7.1=55.7%）は、障害をめぐって、医学モデル、ステレオタイプ、分離の発想が入り混じった状況**となっている。

障害の社会モデル獲得者（医学モデル非賛同&ステレオタイプなし&分離発想なし）のボリューム





# 【 5. 障害の社会モデル獲得者の意識・行動実態 まとめ 】 ①属性別出現率

障害の社会モデルの考え方単独への賛同者（問1\_iに「そう思う」と回答した人62.8%のうち、医学モデルには賛同がなく（「そう思わない」または「どちらでもない」）、ステレオタイプがなく（「そう思わない」または「どちらでもない」）、社会的障壁遭遇時にも分離発想に基づく解決策を選択していない「障害の社会モデル獲得者」の属性別出現状況の特徴は以下の通り。

## 障害の社会モデル獲得者（医学モデル非賛同&ステレオタイプなし&分離発想なし）【グループO】7.1%：

- ▲ 性別・年代：女性50代では11.0%とやや多いのに対し、70代男女では3%程度と少ない。
- ▲ 最終学歴：「短大」卒の人は11.6%に対し、「大学・大学院」は5.5%、「小学校・中学校」は2.1%と少ない。
- ▲ 世帯構成：「単身世帯」では2.0%と少ない。
- ▲ 身近に障害のある人の有無：「身近に障害のある人がいる」層では8.3%、「身近に障害のある人がいない」層では6.4%で、大差が見られない。

※30s以上の層についてのみコメントした。

社会モデル(Q1_i)	グループ	賛同							どちらでもない	非賛同	左記以外	
		L	非賛同・どちらでもない				P	Q				R
			M	なし・どちらでもない		N						
				O	あり							
医学モデル(Q1_h)	ステレオタイプ(Q1_cd)	分離意識(Q2_2・3)										
全体	(n=1,200)	62.8	35.8	13.9	7.1	6.8	21.7	26.8	27.8	7.0	2.5	
男性小計	(n=596)	64.3	33.2	11.7	6.2	5.5	21.1	30.5	25.8	6.9	3.0	
15~19才	(n=36)	47.2	13.9	11.1	8.3	2.8	2.8	30.6	38.9	11.1	2.8	
20~29才	(n=76)	56.6	28.9	11.8	5.3	6.6	17.1	27.6	30.3	9.2	3.9	
30~39才	(n=97)	49.5	22.7	9.3	6.2	3.1	13.4	26.8	38.1	12.4	-	
40~49才	(n=109)	63.3	34.9	12.8	8.3	4.6	21.1	28.4	29.4	5.5	1.8	
50~59才	(n=92)	70.7	39.1	13.0	7.6	5.4	26.1	31.5	20.7	6.5	2.2	
60~69才	(n=110)	73.6	42.7	14.5	5.5	9.1	28.2	30.9	20.0	3.6	2.7	
70~79才	(n=76)	78.9	36.8	7.9	2.6	5.3	27.6	39.5	9.2	2.6	9.2	
女性小計	(n=604)	61.3	38.2	16.1	7.9	8.1	22.2	23.0	29.6	7.1	2.0	
15~19才	(n=35)	51.4	37.1	17.1	5.7	11.4	20.0	14.3	40.0	5.7	2.9	
20~29才	(n=73)	53.4	32.9	12.3	5.5	6.8	20.5	20.5	37.0	5.5	4.1	
30~39才	(n=97)	54.6	38.1	23.7	9.3	14.4	14.4	16.5	40.2	3.1	2.1	
40~49才	(n=105)	61.9	36.2	14.3	9.5	4.8	21.9	25.7	31.4	5.7	1.0	
50~59才	(n=91)	63.7	44.0	20.9	11.0	9.9	23.1	19.8	25.3	8.8	2.2	
60~69才	(n=112)	70.5	43.8	15.2	8.9	6.3	28.6	26.8	18.8	10.7	-	
70~79才	(n=91)	63.7	33.0	8.8	3.3	5.5	24.2	30.8	24.2	8.8	3.3	
地域												
北海道・東北	(n=144)	57.6	29.9	12.5	7.6	4.9	17.4	27.8	31.9	9.0	1.4	
関東	(n=432)	60.2	37.0	14.1	7.2	6.9	22.7	22.7	29.9	7.2	2.8	
中部・北陸	(n=192)	68.8	35.9	10.9	4.7	6.3	25.0	32.8	24.0	4.2	3.1	
近畿	(n=192)	63.5	35.9	15.6	8.9	6.8	19.8	27.1	29.7	4.7	2.1	
中国・四国・九州	(n=240)	65.0	36.7	15.4	7.1	8.3	21.3	28.3	22.9	9.6	2.5	
都市規模												
2大都市	(n=342)	61.7	39.2	13.5	6.7	6.7	25.4	22.2	28.4	8.5	1.5	
15万以上の都市	(n=378)	63.0	33.1	12.4	6.1	6.3	20.4	29.4	27.2	7.4	2.4	
15万未満の市	(n=366)	65.3	36.1	15.6	8.7	6.8	20.5	29.2	25.4	5.2	4.1	
郡部	(n=114)	57.0	33.3	14.9	6.1	8.8	18.4	23.7	35.1	7.0	0.9	

# 【 5. 障害の社会モデル獲得者の意識・行動実態 まとめ 】 ①属性別出現率

社会モデル(Q1_i)		賛同							どちらでもない		非賛同	左記以外
医学モデル(Q1_h)		非賛同・どちらでもない					賛同					
ステレオタイプ(Q1_cd)		なし・どちらでもない			あり							
分離意識(Q2_2・3)		なし		あり								
		L	M	N	O	P	Q	R	S	T		
全体 (n=1,200)		62.8	35.8	13.9	7.1	6.8	21.7	26.8	27.8	7.0	2.5	
職業	自営・自由業－農林漁業 (n=16)	50.0	31.3	12.5	12.5	-	18.8	18.8	25.0	18.8	6.3	
	自営・自由業－自営商工業 (n=129)	65.1	27.9	11.6	5.4	6.2	16.3	37.2	24.0	7.0	3.9	
	自営・自由業－自由業 (n=18)	72.2	22.2	5.6	-	5.6	16.7	50.0	27.8	-	-	
	フルタイム－管理職 (n=32)	68.8	40.6	9.4	-	9.4	31.3	28.1	25.0	3.1	3.1	
	フルタイム－事務・技術職 (n=216)	64.8	43.5	18.1	7.9	10.2	25.0	21.3	25.5	7.4	2.3	
	フルタイム－労務・技能職 (n=143)	55.9	30.1	13.3	8.4	4.9	16.8	25.9	35.7	7.0	1.4	
	パート・アルバイト (n=214)	58.4	36.4	15.0	7.9	7.0	21.5	22.0	34.6	6.5	0.5	
	主婦専業 (n=185)	67.6	41.1	15.7	8.1	7.6	25.4	26.5	24.3	6.5	1.6	
	学生 (n=82)	46.3	23.2	11.0	6.1	4.9	12.2	22.0	41.5	7.3	4.9	
	無職 (n=157)	72.0	36.9	11.5	6.4	5.1	24.8	33.8	15.9	7.0	5.1	
最終学歴	小学校・中学校 (n=97)	58.8	27.8	7.2	2.1	5.2	20.6	30.9	26.8	7.2	7.2	
	高等学校 (n=546)	61.0	32.6	13.2	7.7	5.5	19.0	27.8	29.9	7.5	1.6	
	各種専門学校 (n=147)	61.9	32.7	15.0	6.8	8.2	17.7	29.3	26.5	7.5	4.1	
	短大 (n=129)	65.1	45.0	17.8	11.6	6.2	27.1	20.2	27.1	7.8	-	
	大学・大学院 (n=274)	67.9	42.7	15.3	5.5	9.9	27.4	25.2	23.7	5.5	2.9	
世帯年収	200万円未満 (n=99)	63.6	29.3	14.1	5.1	9.1	15.2	34.3	25.3	7.1	4.0	
	200～300万円未満 (n=127)	65.4	33.9	14.2	7.9	6.3	19.7	31.5	27.6	5.5	1.6	
	300～400万円未満 (n=157)	70.7	38.2	16.6	7.6	8.9	21.7	32.5	24.2	4.5	0.6	
	400～500万円未満 (n=152)	66.4	43.4	19.1	9.2	9.9	24.3	22.4	23.7	7.2	2.6	
	500～600万円未満 (n=136)	63.2	39.0	14.0	6.6	7.4	24.3	24.3	22.8	13.2	0.7	
	600～700万円未満 (n=112)	56.3	33.0	11.6	5.4	6.3	21.4	23.2	33.0	8.9	1.8	
	700～800万円未満 (n=94)	55.3	35.1	12.8	7.4	5.3	22.3	20.2	38.3	5.3	1.1	
	800～900万円未満 (n=49)	65.3	46.9	20.4	8.2	12.2	26.5	18.4	24.5	8.2	2.0	
	900～1000万円未満 (n=49)	71.4	38.8	16.3	8.2	8.2	22.4	32.7	14.3	10.2	4.1	
	1000～1200万円未満 (n=42)	71.4	40.5	9.5	9.5	-	31.0	28.6	23.8	-	4.8	
1200万円以上 (n=29)	65.5	34.5	6.9	3.4	3.4	27.6	31.0	31.0	-	3.4		
家族構成	単身世帯 (n=98)	58.2	27.6	12.2	2.0	10.2	15.3	30.6	28.6	9.2	4.1	
	夫婦だけの世帯 (n=260)	71.2	39.2	13.8	7.7	6.2	25.4	31.5	21.2	5.4	2.3	
	夫婦と親の世帯 (n=32)	78.1	37.5	18.8	6.3	12.5	18.8	40.6	18.8	3.1	-	
	夫婦と子供の世帯 (n=567)	60.0	34.6	12.3	7.8	4.6	21.9	25.2	31.2	7.2	1.6	
	親と夫婦と子供の世帯 (n=116)	63.8	37.9	15.5	5.2	10.3	22.4	25.0	25.0	6.0	5.2	
	その他 (n=120)	55.8	36.7	18.3	8.3	10.0	18.3	19.2	30.0	10.0	4.2	
身近に障害のある人があるか	身近に障害のある人がある (n=495)	68.5	41.4	17.8	8.3	9.5	23.6	26.7	23.8	7.3	0.4	
	身近に障害のある人がいない (n=687)	60.1	32.6	11.5	6.4	5.1	20.8	27.4	30.9	7.0	2.0	

# 【 5. 障害の社会モデル獲得者の意識・行動実態 まとめ 】 ②社会的障壁遭遇時の意見・行動

障害の社会モデル獲得状況別に、社会的障壁遭遇時の意見・行動を見てみた。

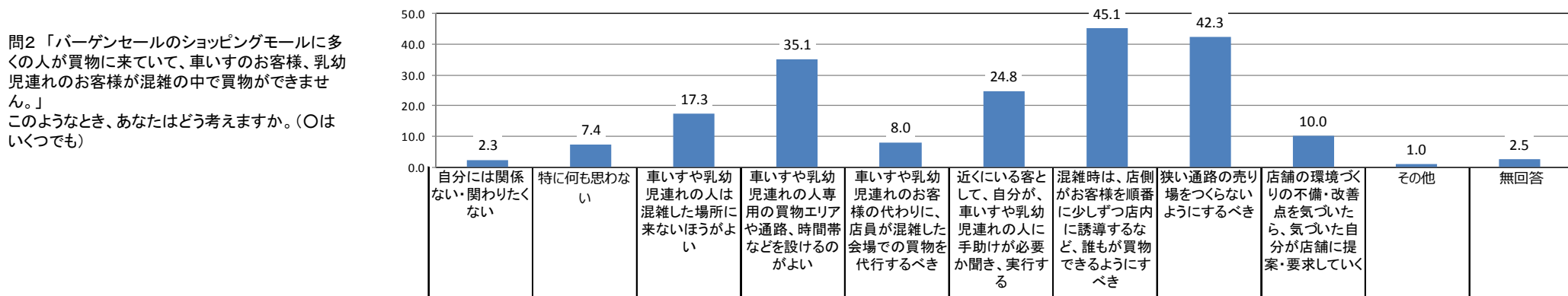
## 社会モデル賛同者はソフト面・ハード面による解決選択率が高い。

▲ 障害の社会モデル獲得者（グループO）は、ハード面・ソフト面による解決を考える人が全体に比べて多い（「混雑時は、店側がお客様を順番に少しずつ店内に誘導するなど、誰もが買物できるようにすべき」56.5%、「狭い通路の売り場をつくらないようにするべき」49.4%、「近くにいる客として、自分が、車いすや乳幼児連れの人に手助けが必要か聞き、実行する」35.3%）。

## 社会モデルの理論と行動にはまだ大きな隔たりが存在。

▲ 「店舗の環境づくりの不備・改善点を気づいたら、気づいた自分が店舗に提案・要求していく」という社会的行動に踏み込んだ内容を選択しているのは、障害の社会モデル獲得者（グループO）でも全体（10.0%）並みの10.6%にとどまっており、社会モデルの理論と行動には、まだ大きな隔たりが存在していることを示唆する結果となった。

社会的障壁遭遇時の意見・選択行動の状況（複数回答）（%）



問2 「バーゲンセール時のショッピングモールに多くの人買物に来ていて、車いすのお客様、乳幼児連れのお客様が混雑の中で買物ができません。」  
このようなとき、あなたはどのように考えますか。（○はいくつでも）

社会モデル (Q1_i)	医学モデル (Q1_h)	ステレタイプ (Q1_cd)	分離意識 (Q2_2・3)	選択肢番号	無関心		分離による解決		ソフト面による解決		ハード面による解決	障壁除去のための社会への働きかけ	その他	無回答	
					1	10	2	3	4	7					6
全体				(n=1,200)	2.3	7.4	17.3	35.1	8.0	24.8	45.1	42.3	10.0	1.0	2.5
賛同	非賛同・どちらでもない	なし・どちらでもない	なし	L (n=753)	2.1	4.6	16.7	39.4	10.4	29.3	50.5	45.7	12.7	0.9	0.7
				M (n=429)	2.3	2.8	16.6	42.0	9.3	30.8	54.5	47.6	10.7	0.5	0.2
				N (n=167)	1.2	3.6	10.8	40.7	10.2	31.1	50.3	49.7	10.8	1.2	-
				O (n=85)	1.2	7.1	23.5	49.4	9.4	35.3	49.4	56.5	10.6	2.4	-
				P (n=82)	1.2	-	22.0	82.9	11.0	26.8	51.2	42.7	11.0	-	-
				あり	Q (n=260)	3.1	2.3	20.4	42.3	8.8	30.8	57.3	46.2	10.8	-
賛同	R (n=321)	1.9	7.2	17.1	35.5	11.8	27.4	44.9	43.0	15.6	1.6	1.2			
どちらでもない	S (n=333)	3.0	11.7	18.3	29.7	4.8	16.5	36.3	38.4	4.5	0.9	1.5			
非賛同	T (n=84)	2.4	11.9	23.8	26.2	1.2	25.0	41.7	35.7	9.5	2.4	2.4			

# 【 5. 障害の社会モデル獲得者の意識・行動実態 まとめ 】 ③共生社会の実現度合評価

共生社会の実現度評価（0～10点）を、障害の社会モデル獲得状況、及び、障害理解（問1）、社会的障壁に接した場面での行動イメージ（問2）、ステレオタイプ有無、分離発想有無、身近に障害がある人の有無別に見てみた。

- ▲ 障害の社会モデルの獲得者（O）は、10点満点中平均3.7点。全体の中では共生社会の実現レベル評価はやや低めに捉えられている。
- ▲ 共生社会の実現レベルをやや高めに捉えているのは、障害に対する無関心層。

共生社会の実現度合評価 平均値

問3 いまの日本の社会は、どの程度、「障害の有無にかかわらず、女性も男性も、高齢者も若者も、すべての人がお互いの人権や尊厳を大切に支え合い、誰もが生き生きとした人生を享受することのできる**共生社会**」を実現していると思いますか。0～10までの11段階でお答えください。（Oは1つだけ）

社会モデル (Q1_i)	医学モデル (Q1_h)	ステレオタイプ (Q1_cd)	分離意識 (Q2_2・3)		平均値	標準偏差	
全体					(n=1,200)	4.0	1.7
社会モデルタイプ分類	賛同			L	(n=753)	4.0	1.7
	非賛同・どちらでもない			M	(n=429)	3.8	1.7
	なし・どちらでもない			N	(n=167)	3.5	1.7
	なし			O	(n=85)	3.7	1.8
	あり			P	(n=82)	3.3	1.5
	あり			Q	(n=260)	4.0	1.6
	賛同			R	(n=321)	4.2	1.7
	どちらでもない			S	(n=333)	4.0	1.5
	非賛同			T	(n=84)	4.2	2.2

		平均値	標準偏差
全 体		(n=1,200)	4.0 1.7
障害理解（問1）	共生社会を実現すべき あてはまる 計	(n=1,061)	4.0 1.7
	予め都市等デザインすべき あてはまる 計	(n=1,018)	4.0 1.7
	一方的に助けられるべき あてはまる 計	(n=486)	4.2 1.7
	障害のある人はかわいそう あてはまる 計	(n=536)	4.1 1.6
	障害のある人を迷わず援助できる あてはまる 計	(n=861)	4.0 1.7
	仲間に入れることに抵抗感はない あてはまる 計	(n=812)	4.0 1.7
	障害問題は自分にかかわりない あてはまる 計	(n=161)	4.3 1.7
	障害は個人の問題  あてはまる 計 （障害の個人モデル）	(n=394)	4.1 1.7
	障害は社会の問題  あてはまる 計 （障害の社会モデル）	(n=753)	4.0 1.7

			平均値	標準偏差
全 体			(n=1,200)	4.0 1.7
社会障壁に接した場面での行動イメージ（問2）	1	無関心	自分には関係ない・関わりたくない	(n=28) 4.1 1.8
	10	無関心	特に何も思わない	(n=89) 4.3 1.1
	2	分離による解決	混雑した場所に来ないほうがよい	(n=208) 4.0 1.7
	3		専用の買物エリア、時間帯など設ける	(n=421) 4.0 1.6
	4	ソフト面による解決  自発行動	店員が買物を代行すべき	(n=96) 3.7 1.7
	7		自分が手助けが必要か聞き実行する	(n=298) 4.0 1.9
	6		誘導等で誰もが買物できるようすべき	(n=541) 3.9 1.7
	5	ハード面による解決	狭い通路の売場をつくらぬようすべき	(n=507) 3.9 1.6
	8	障壁除去の為の社会への働きかけ	不備等を自分が店舗に提案等する	(n=120) 4.1 1.9
	9		その他	(n=12) 3.3 0.8

		平均値	標準偏差
ステレオタイプ	あり (助けられるべきorかわいそうと思う計)	(n=686)	4.1 1.6
	なし	(n=485)	3.8 1.7
分離発想	分離発想あり (Q2_2・3いずれかにon)	(n=567)	4.0 1.6
	分離発想なし (Q2_2・3ともにoff)	(n=603)	4.0 1.6
関係	身近に障害のある人がいる	(n=495)	3.9 1.7
	身近に障害のある人がいない	(n=687)	4.0 1.6

㊦ 共生社会推進、ユニバーサルデザインのまちづくり推進に賛同する人は、全体で8割を超える。[p12]

㊦ **障害の社会モデル**＝「障害は、個人の心身機能の障害と社会的障壁の相互作用によって作り出されているものであり、社会的障壁を取り除くのは社会の責務である」という考え方に賛同する人は、全体の62.8%で、過半数を占める。[p16]

しかし、障害の社会モデルに賛同するが、障害の医学モデル＝「障害は、病気や外傷等から生じる個人の問題であり、障害の原因を除去・対処するには、治療や訓練等もっぱら個人の適応努力が必要である」には賛同しない人は、全体で35.8%に絞られる。[p23]

そのうち、「障害のある人は一方的に助けられるべき存在だと思う」と「障害のある人はかわいそうだと思う」というステレオタイプを持たない人は、全体の13.9%。さらに社会的障壁遭遇時に「車いすや乳幼児連れの人混雑した場所に来ないほうがよい」、「車いすや乳幼児連れの人専用の買い物エリアや通路、時間帯などを設けるのがよい」といった分離発想に賛同しない人は、**全体で7.1%（障害の社会モデルの獲得者；グループ〇）**と少数にとどまる。[p26]

このように、障害をめぐるのは、社会モデルに賛同する人の中にも、医学モデルの考え、ステレオタイプ、分離の発想が入り混じった状況が多くみられることが明らかとなった。

㊦ 社会的障壁に接した場面での行動イメージ（複数回答）については、「混雑時は、店側がお客様を順番に少しずつ店内に誘導するなど、誰もが買物できるようにすべき」（45.1%）、「狭い通路の売り場をつくらないようにすべき」（42.3%）がともに4割超で、ソフト・ハード両面での解決策が上位となっている。

次いで高いのは「車いすや乳幼児連れの人専用の買い物エリアや通路、時間帯などを設けるのがよい」（35.1%）で、「分離」という共生社会・ユニバーサルデザインに反する方法を選ぶ人が3割以上と多かった。

「店舗の環境づくりの不備・改善点を気づいたら、気づいた自分が店舗に提案・要求していく」という社会的アクションに踏み込んだ回答は、全体で10.0%。障害の社会モデルの獲得者（グループ〇）でも10.6%であり、全体結果と差異がない。障害の社会モデルの理論と行動にはまだ大きな隔たりが存在していることがわかる。[p29]

㊦ 日本の社会において共生社会が実現されていると考えられる割合を「0：全く実現していない」～「10：完全に実現している」で評価を求めた結果、2017年11月時点での日本の共生社会実現レベル（平均値）は、10点満点中4.0点と低い。[P19]



テーマ:「ユニバーサルデザイン」についてお伺いします

【すべての方に】

問1 下記について、あなたの考えとして、もっとも近いと思われるものに○をつけてください。

(それぞれ○は1つずつ)

	非常に 思う	そう 思う	そう 思う	やや 思う	やや ない でも	あまり 思う ない	そう 思う ない	全く 思わ ない	NA
a) 障害の有無にかかわらず、女性も男性も、高齢者も若者も、すべての人がお互いの人権や尊厳を大切に支え合い、誰もが生き生きとした人生を享受することができる共生社会を実現すべきだと思う	40.5	34.4	13.5	7.5	0.7	1.2	2.0		
b) 障害の有無、年齢、性別、人種等にかかわらず、多様な人々が利用しやすいよう、あらかじめ都市や生活環境をデザインすべきだと思う	31.0	36.3	17.5	10.5	1.0	1.3	2.0		
c) 障害のある人は、一方的に助けられるべき存在だと思う	5.9	14.6	20.0	27.7	15.7	6.2	2.4		
d) 障害のある人はかわいそうだと思う	5.8	11.8	27.2	26.8	11.6	7.5	2.6		
e) 障害のある人が困っているときには、迷わず援助できる	13.0	28.4	30.3	18.8	4.4	1.2	2.8		
f) 障害のある人を自分たちの仲間に入れることに抵抗感はない	15.3	29.0	23.4	22.2	4.4	1.5	2.3		
g) 障害の問題は、自分にはかわりがない	2.0	3.6	7.8	29.0	18.1	18.6	2.8		
h) 障害は、病気や外傷等から生じる個人の問題であり、障害の原因を除く・対処するには、治療や訓練等もっぱら個人の道徳努力が必要である	4.9	9.5	18.4	33.4	13.8	9.5	8.2		2.3
i) 障害は、個人の心身機能の障害と社会的障壁の相互作用によってつくり出されているものであり、社会的障壁を取り除くのは社会の責務である	13.0	23.3	26.5	27.8	4.4	0.9	1.7		2.5

fig: 「心のバリアフリー」に向けた汎用性のある研修プログラムの基本プログラム群・ツール「研修における評価アンケート」より  
abcd: 内閣府「ユニバーサルデザイン2020行動計画」より h: 文部科学省 障がい者制度改革推進会議資料より

問2 「バーゲンセールのショッピングモールに多くの人が買物に来ていて、車いすのお客様、乳幼児連れのお客様が混雑の中で買物ができません。」  
このようなとき、あなたはどうか考えますか。(○はいくつでも)

2.3	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
17.3	4.1	12.7	23.5	14.8	22.8	7.8	4.3	1.7	0.3	NA7.3
35.1	0.5	4.1	12.7	23.5	14.8	22.8	7.8	4.3	1.7	0.3
8.0	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
42.3	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
45.1	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
24.8	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
10.0	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
1.0	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
7.4	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9

NA2.5

問3 いまの日本の社会は、どの程度、「障害の有無にかかわらず、女性も男性も、高齢者も若者も、すべての人がお互いの人権や尊厳を大切に支え合い、誰もが生き生きとした人生を享受することのできる共生社会」を実現していると思いますか。0~10までの11段階でお答えください。(○は1つだけ)

0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
0.5	4.1	12.7	23.5	14.8	22.8	7.8	4.3	1.7	0.3	NA7.3

全く実現していない

完全に実現している

問4 あなたの身近に障害のある人がいますか。あてはまるものを全てお答えください。(○はいくつでも)

1	2	3	4	5	6
14.1	6.0	2.8	19.9	5.8	57.3
NA1.5					NA1.5



## 《 引用・転載時のお願い 》

本レポートの外部への引用・転載の際は、下記連絡先にメールにて掲載のご連絡をお願い致します。

**連絡先：日本リサーチセンター広報室 メール：information@nrc.co.jp**

**掲載では必ず当社クレジットを明記していただき、  
調査結果のグラフ・表をご利用の場合も、データ部分に当社クレジットの掲載をお願い致します。**